

歴史において、大義にいのちを捧げるとは

永安 幸正

目次

- 一 いのちより大切なものがあるか
- 二 国家の安全保障にいのちを捧げる
- 三 何が大義か——個人と国家から、人類の安全保障へ——
- 四 慎重な思考実験を通じて歴史を創造する
- 五 新しい戦争倫理——先制攻撃論に大義ありや——
- 六 同盟主義か国連主義か
- 七 日本は、新次元の「人間の安全保障」に献身を
- 八 自衛隊派遣についての思考実験

一 いのちより大切なものがあるか

かつて一九七七年、連合赤軍によって日航機がハイジャックされ、人質事件という緊急の事態が起こったときに、日本の福田赳夫総理大臣が「いのちは地球より重い」と述べて、一方で

相当数の日本国民に感銘を与えたとともに、他方、世界中からの批判を惹き起こした。日本はテロに弱い、いのちより大切なものがある、という批判であった。

人類の歴史には、このように崇高な価値目的に向けて、「極限においてはいのちを捧げる」という意味での「忠誠」の問題があるが、それは時代状況に応じて、さまざまな形で繰り返し問い直される問題である。

二〇〇四年初め、イラクへの自衛隊の派遣問題と絡んで、この重大な意味を孕む言葉が復活し、日本国民お得意の「遅れてやって来た論争」が起きた。

一方、派遣反対派曰く、戦闘状態の可能性のある危険な所に自衛隊を派遣してはいけけない、憲法違反となる、大義のない戦

争や武力紛争のところに足を踏み入れるべきではない、と。

他方、派遣賛成派曰く、いや派遣すべきなのだ、テロで危険な状態であり、イラクの住民の皆さんが困窮しているからこそ、それを解消し平和な暮らしを回復するために、人道支援として行くのであって、危険だから近づかないというのは、臆病者の言うことだ、と。

日本人は、大東亜戦争の敗戦よりこのかた、戦争行つて国家のためにいのちを懸けるといふことをしないで済むようになった。すぐ目と鼻の先で行われた朝鮮動乱（戦争、一九五〇～五三）でも、軍需景気によって一息ついた程で、「朝鮮の人の血によって日本は復興したのだ」とソウルで聞かされた。

半世紀以上も「一国平和主義」に安住してきたわれわれ日本国民にとって、イラク問題という事態は画期的な、抜き差しならない経験であり問いかけである。

このようなことは、常日頃、国民が議論して方針を出して置くべきことであるのに、問題が起きてから、どうするか議論し始めるのが、日本人のお家芸のようだ。

国連の平和維持活動（PKO）どまりまでは、一九九〇年代前半の湾岸戦争などを機に議論してあるが、さらには平和維持軍（PKF）つまり武力紛争地域への自衛隊派遣は、憲法違反

だからと、未だ検討していなかったのである。それは「軍隊・戦力をもたない」、「国際紛争における武力行使をしない」という国家方針——身勝手な一國平和主義——のせいである。

しかし、「いのちを懸けても守るべき崇高なものがあるか」というような問いに答えて行くことは、自衛隊の海外——外国——派遣を正当化できるかどうかを判断するためだけにとどまらない、まして単に「現行の憲法に反するかどうか」での判断に収まらない、より広く深い問いなのではないか。

はたして、いのちとは何であり、懸けるとは何に對してか、どんな方法で懸けるのか。

問いは簡単でない。ここには、一つ、落ち着いて深くかつ正確に考えてみるべき問いがあるのでないだろうか。

一般に、人の世にいのちより大切なものがあるということ、否定できないであろう。しかし、単にいのちより大切なものがあるというだけでは、何をいつているのか全く不明ではないか。ここには、次のような問いが隠れているのではないだろうか。

①まず、いのちとは何か。

いのちとは、「あの世」（彼岸）ではなく、「現世」（此岸）の

いのちを懸ける場合の関連図

—部分と全体、今と永遠—

捧げる 対象目的 捧げる いのち手段	人類全体 のいのち 永遠不滅	数カ国の国民 のいのち 永遠不滅	一国民の いのち 永遠不滅	ある国民の 一部のいのち 永遠不滅	誰か一人の いのち 永遠不滅
人類全体の いのち	ありうる ○	ありえない ×	ありえない ×	ありえない ×	ありえない ×
全体をいのちを部分のいのちのために犠牲にすることは無意味。 全体が全体のために犠牲となるとは、自殺・玉砕と同じで例外。					
幾つかの国の いのち全体	ありうる ○	ありうる ○	ありえない ×	ありえない ×	ありうる ×
犠牲が相手のいのちの価値より大きく、無意味。					
ある国の国民 全体のいのち	ありうる	ありうる	ありうる	ありうる	ありうる
しかし、ある国の国民のいのち全体を犠牲に捧げることは無意味。 国民全体を減ぼしては意味がない。					
ある国民の 一部のいのち	ありうる	ありうる	ありうる	ありうる	ありうる
例えば、自国の軍隊を国際平和活動に派遣し犠牲者が出る場合。 奉仕対象となるいのちより犠牲になるいのちの数がより大きいときでも有 意味。					
一人のいのち	ありうる	ありうる	ありうる	ありうる	ありうる
自己のいのちを捧げて、より大なるいのちを救うとか、その価値を高める のは、大いに意味がある。例えば、勇敢な韓国の留学生の場合。					

(注) ある国が国民のいのちの全力を懸けて、自国の国民を救おうとするときなどに、意図しないで、「自国が減ぶという犠牲」が起きる可能性がある。犠牲奉仕の行為には、次の原則があるのではないか。①人類全体のいのちを犠牲にしてはならない。②ある国民のいのち全体を犠牲にしてはならない。③より大きな数のいのちのためにも、より小さな数のいのちを安易に犠牲にしない。④一切の根底にある大原則・公理は人類のいのち全体及び国民のいのち全体の永遠不滅（持続的発展）である。

全体のいのちとは、現世のいのちだけでなく、過去・現在・未来にわたる此岸、彼岸のいのちである。未来の国家の新生と永久不滅に懸けて戦場に散華した出征兵士や特攻兵士などの悲願を忘れてはならない。

いのちということであろうが、しかし、この世のいのちだけに限らない広い視野が必要となろう。——英霊祭祀の問題が各国ともかかわる。

②次に、誰のいのちか。

これには、次の三つの場合がある。

(一)集団全体の中の部分のいのち、つまり個人のいのち。もしくは少数の人々のいのち。

(二)あるいは国民全員のいのち。

(三)さらに人類全体のいのち。

③さらに、いのちより「大切なもの」とは何か。

これは、何らかの高い目的価値であって、いのちを懸けるとは、極限状況においては「現世のいのちを犠牲にし死を賭して」実現すべきもの、保持すべきものである。

そこで、いのちを懸けるという行為には、どんなものがあるかを考察してみよう。

まず、殉職というものがある。これには、普通の仕事・任務において懸命に努力し、事故などにより、極限ではいのちを犠牲にすることも含まれる。特に、軍人や警察官など、公務員の殉職の場合がある。もちろん、一般に軍人の戦死も殉職である。

る。

よく出来た国であれば、各国は、公務での殉職に対しては、その名誉を称え、遺族が暮らしに困らないように年金などの形で何らかの保障を与えるのが常である。

また、ここにはボランティア、特に外国での人道支援のために自己のいのちを犠牲にするという場合があるが、これは後に考えてみたい。

これは、「全体のいのち」を存続発展させるために、その「部分のいのち」が自己を犠牲にして奉仕することである。

国家というものが成立し発展する以前に、一族、氏族、部族が最高価値の集団である場合には、その集団のメンバーはその「自分の集団」のためにいのちを懸けることが当然とされた。さらに、国家というものが成立して国家対立の時代になれば、いのちを懸けるものとして、祖国への「報国」、特に国防への参加が最も重要な価値目的となってくる。すなわち、祖国に尽くすという大義のために、国民各自が自分のいのちを犠牲とするのである。

近代国家において国家が正規軍を持つようになると、国民が兵役の義務に献身し、祖国の行う戦争においていのちを捧げる。日本でいえば、大東亜戦争末期における神風特別攻撃隊

は、この報国の最も華々しい事例であった。彼方、中国大陸に行けば、「抗日戦」において祖国防衛のために散華した兵士や人民が称えられる。

次に、歴史上の例をあげれば、いのちを懸ける行為には、仇討ちというものもある。仇討ちとは、失われたいのちと名誉を回復するための、いのちを懸けた決死の戦いなのであった。

先に赤穂義士のところで述べたように、主君や親祖先のための仇討ちにいのちを懸ける場合である。仇探しに苦節何年も各地を放浪するとか、運よく仇に巡り合っても返り討ちになるとか、首尾よく目的を果たしても切腹や打ち首などの形で処刑されることもある。

日本の仇討ちでは、「いのちより大切なものがある」という武士道の観念がその行為を促した。例えば、赤穂義士の四十七士は、主君の仇討ちという武士道的な忠義と名誉に自分たちのいのちを捧げた。結果は、死罪という処罰を受けたが、切腹という名誉の形式を与えられた。義士たちは、大義に生きたと称えられ、武士としての忠節を完成した。

ではそのとき、仇討ちの大義とは何だろうか。やはり武士道においても、武士階級という「人間としてのいのち全体」のよ

り良い理想的なあり方・忠義が大義であり、その大義に対して仇討ちが貢献すると見なされたからではないか。仇討ちは、少数のいのちを犠牲にして、より大きいのち集団の価値と秩序を高めることに役立つからこそ、一つの道とされたのではないか。

忠義・忠誠の行為として、正義と公平な処罰、恩義への報恩、怨恨の清算つまり不公平な処罰による怨恨を人の世に残さないこと、などをもたらずのである。人間の世の中には、マイナスの価値を償い、事に応じてプラスとマイナスの価値の均衡を図ることが必要なのである。

これらの行為が名誉という価値を帯びるものとして称えられたのである。赤穂義士の行為についてはすでに述べたが、このような永遠の意味があったのである。

尤も、武士道の忠義の行為の例として、悲劇的な場合もある。全員がいのちを奪われたのではないが、統一政権と国家成立の後、一つの藩が丸ごと虐げられた事例がある。明治維新に際して、徳川方に立って敗れた会津藩の場合がそれであり、下半島に追いやられた斗南藩が思い起こされるのである。

新撰組も結局は滅亡した。それは滅び行く幕府方に属し、し

かも隊士という「部分のいのち」が犠牲となったものであった。ただ、惜しむらくは、一途な青年たちの献身も少々無駄に終わったかに見えることである。いのちを捧げるべき歴史の大義を読み間違えると、何らかの目的価値を目指す行為であっても、方向性の狂った悲劇となるのである。

さらに、いのちを懸けるものとして殉死がある。

これは、自分の主君や貴族など大恩ある人の死に当って、自分が自死して死出の旅路のお供をする場合か、あるいは生け贄として死を強制されるものである。さらには、上位者に何らかの件について謝罪する、死してお詫びする、という場合もある。

殉死は古代から行われた。お隣の中国でも、既に殷の時代に行われた。戦乱の時代には殉死は珍しいことではなかったという。

日本でも『日本書紀』に、垂仁天皇の弟君・倭彦命の崩御に際して殉死が行われ、それがあまりにもむごい状態であったので、垂仁天皇の勅令が出され、以後は殉死を禁止するということになり、人の殉死の代わりに埴輪というものを作り、それを死者に添えて埋葬することになった、と述べられている(『日本書紀』二、岩波文庫、四二―四四ページ。『国史大辞典』

第七卷、四一六ページ)。

殉死は、江戸時代に徳川幕府によって改訂された「武家諸法度」において禁止され、実行するとその関係者が処罰されるようになったので、以後ほとんど行われなくなった。

ところが、明治四十五年、乃木希典大将の殉死が起こった。

大将は明治天皇に殊の外愛顧を蒙った方だが、明治天皇が薨去されたとき、夫人ともども跡を追って殉死なさった。殉死することで、明治天皇に対する忠義を全うされた。しかも、ご子息が二人とも戦死したから、乃木家直系の子孫は途絶えることになった。

乃木將軍の辞世は次のようである。

神あがりあがりましたぬる大君の

みあとはるかにおろがみまつる

うつ志世を神さりましたし大君の

みあと志たひて我はゆくなり

静子夫人の辞世は次の通り。

出でましてかへります日になしときく

けふの御幸に逢ふぞかなしき

乃木大将の殉死の理由は、ご自身の説明によればこう述べられている。

「自分此度御跡ヲ追ヒ奉リ、自殺候段恐入候儀、其罪ハ不軽存候。然ル處明治十年ノ役ニ於テ軍旗ヲ失ヒ、其後死處得度心掛候モ其機ヲ得ズ。
皇恩ノ厚ニ浴シ、今日迄過分ノ御優遇ヲ蒙、追々老衰、最早御役ニ立候時モ餘日無候折柄、此度ノ御大葬、何共恐入候次第、茲ニ覚悟相定メ候事ニ候」

（大将のこの「遺言条々」には、ルビを追加した。乃木神社のご厚意によりその活字版をお送りいただいた。篤く感謝申し上げる。乃木大将のことについては、松下芳雄『乃木希典』人物叢書、吉川弘文館、昭和三十五年。『乃木希典日記』金園社、昭和四十五年。『乃木希典全集』乃木神社編集刊行、平成六年、補遺は平成九年、ルビ追加。）

乃木大将の殉死は、明治天皇・国家に対する謝罪と責任償却の意味を込めた殉死であり、伝統的な精神におけるいのちの懸け方であった。乃木大将は、二〇三高地攻略の「不首尾」ゆえにとかくのマイナス評価を受けたが、単なる優れた戦略家であった他の大将たちよりも、かえってほかに高い令名を千載

青史に遺すゆえんとなった。

殉死を、恨みを晴らす、マイナス価値の回復、処罰の均衡化という動機から行われる仇討ちと比較すれば、随分と異なった意味を帯びた行為であるように見える。殉死は謝罪と責任決済、さらに、ご恩報・報恩という意味を込めた行為である。

この世で失策を犯して価値の欠損を引き起こした人物が、この世のいのちよりも大切な価値のために、自己の此岸のいのちを犠牲とすることで、その価値の不均衡——ご愛顧に対する奉公の不足——の解消と価値の均衡化を図る。現世のいのちを捧げるといふ点では、殉死も仇討ちも根本的には同一なのである。

この他に、いのちを懸けるには、果たし合いというものもある。当事者の間の問題について、話し合いで決着がつかない場合、あるいは武道家が技の優劣をつけるための試合として、真剣で勝負を行う場合である。

日本では、武士が「刀に懸けて」として争った場合があり、また生涯剣の奥義を極めて試合を続けた宮本武蔵のような場合がそれである。ヨーロッパでも、騎士（ナイト）同士の名誉・面子争い、女性を取り合う決闘、武道の優劣を競うものなどの物語に事欠かない。

宗教的な行為で、「現世のいのちより大事なものがある」とし、それにいのちを懸ける場合もある。

現世のいのちを懸ける行為には修行の場合もある。仏教などで即身成仏そくしんじょうぶつの一つの形として、生きたままミイラになり入寂にじやくするため、食物を断ち「自死じじ」するという場合である。宗教的修行としての「即身成仏」では、自ら進んでミイラになるために、断食だんじきなどにより現世のいのちを断つが、日本では、空海くうかいはじめ幾人もの仏教僧侶ぶつぎょうそうりよがそれを行った。

この世と違う他世たせい、来世らいせいというものを求める思想においては、現世のいのちに固執こしじする動機は強くないこともある。しかし、不思議なことに、そういう現世否定の行為が、かえって現世での人々の生き方に、そして歴史に、多大の作用を及ぼすもののようなのである。

次は「殉教じゆんきやう」である。

殉教とは、迫害はくがいの中で自己の信仰しんぎやうを貫き通すとおために、あるいは相手の非ひを咎め迫害はくがいや侵略しやくりやくを押し止めるために、または自分たちの集団を防衛するために、いのちを犠牲にする場合である。

キリスト教では、殉教の事件は数多い。まず、イエスご自身

がそうであるといえるし、古代ローマ帝国ネロ時代のパウロやペテロがそうであった（『キリスト教大事典』教文館、五四〇～四一ページ）。しかし、キリスト教がヨーロッパに広がるとともに、キリスト教徒に迫害されたユダヤ教徒にも殉教の事件は多かった。ユダヤ、キリスト、イスラムという三つの宗教の間に、この殉教が長く続いた。

宗教的な信条しんじようによる殉教は、最も激しく強靱きやうじんな行為であり、歴史の方向に強く影響を与える。殉教では、宗教の信仰を守り通す上で、迫害はくがいに耐えていのちを懸け、死に赴おもむき、来世らいせいにおいて神のもとに行くことを希望する。これは、古来どんな宗教にも見られたが、どうも一神教・一仏教（大日如来教など）の場合に、殉教の行為は多いようである。

儒教の場合には、その教えによって、主君のための忠ちゆうか、親祖先おやそんに対する孝かうに、いのちをかける、という場合もある。これは神や仏などの教えのために行う殉教というほどではないが、一種の殉教ではあろう。

日本の例を挙げると、江戸時代初めの天草あまくさ（四郎時貞しろうしきさだ）の乱は、いろいろな意味を孕はらんだ歴史事件であったようだが、殉教という宗教的意味を抜きにしては到底理解とらできまい。すなわち、宗教的な意味を込めて、「現世のいのちを超えた大切なも

のがある」という考えと行動が、そこに行われたのである。

こうした殉教においては、「この世のいのち」を棄てる人々は、あの世において神仏に、天に、あるいは祖国の先祖に称えられ、「新たないのち」に生きると考える。

日本の特攻でも、散華した兵士たちの多くは、若い身で同じように一種の宗教的な覚悟に達したのではないだろうか。

イスラムの人々が自爆テロという形で殉教するのは、その聖戦（ジハード）を通じて来世において天国に行けると期待するからではないか。『コーラン』の初めには、来世・天国のことを思いなさい、と教えられている。

もちろん、アラブ世界に詳しい人々によれば、アメリカを嫌う青年たちも、実は今日アメリカで花開いている豊かな現世文明を嫌うのではなく、むしろそれには憧れているのであるが、イスラム社会が一向に豊かになることができずにいるために、豊かなアメリカ型の文明を憎み、自分たちの古来の生き方にくらべて、過激な原理主義に走るのであるという。そういう一面もあるのか。

今日のイスラムの人々による自爆テロも、殉教の意味を帯び

たものであるが、どうもその背景には、イスラム社会がユダヤ・キリスト教の社会と比べて経済的にも格段に遅れてしまっている、人々の生活が貧しいところから、絶望的な精神状態に陥っている、それで、イスラムの本来の生き方にこだわる。かくて極端に過激な原理主義に突進するのではないか。——これは俗な理解かも知れない。

一般の青年たちは、実はアメリカ文明の豊かさに憧れているが、それが手に入りそうもないので、憧れのアメリカ文明を否定するという心情に捉えられるのではないか、という見方である。この点は、イスラムの人々にうかがいたい。

だから、そうした自爆テロをなくすには、彼らが求める「自立的なイスラム型の純粋で豊かな社会」を実現することが不可欠で、われわれが「いのちを懸けて」手助けをしなくてはならない、という見方も成り立つ。これは、殉教というものの現実主義的な解釈であり、解決法であるといえよう。

イラクをどうするかという問いについて、今後の一つの解答の方向性がここにあるのではないか。

所詮、どの民族も、自分の運命は自分で決めるしかないのだから、自己責任の原則はここでも貫徹するが、自立を支援する側もよく考えていくべきだ。

現代国家の責任と相互扶助

—個人、祖国、地球世界—

欲求の成り立ち	国民の安全保障	人間の安全保障
成長欲求	国民の、個人としての、 集団としての、人格的な 成長発展を実現	すべての人間の、人間 としての人格的な成長 発展の実現
自尊の欲求	祖国と自己への誇りと 生きる知恵を与える 国民教育	世界と自己への誇りと 生きる知恵を与える 人間の教育機会の保障
所属欲求	居住と国籍を 共に保障する	居住と国籍を共に 確保、難民を救済
生理的欲求	国民の衣食住、 衛生・医療、介護	飢饉の克服、衣食住、 水、衛生、医療
安全の欲求	国防：侵略の防止 自国民の生命財 産の安全を確保 領域の環境を保全	侵略の相互禁止 国家主権の尊重 互敬・平等・博愛 地球環境の保全



(注) 欲求の考え方は、おおむねアブラハム・マズローによる。国民国家と人類世界にそれを適用する。国家と世界は、段階的な人間の欲求を充たす働きを、各人から期待され、かつ各人が進んで自主的に献身する組織（国家）であり、集団（人類社会）である。

アメリカの考え方には、少々思慮しりよが足りないと思う。歴史的背景を軽視して、いたずらにアメリカ型の民主主義と個人主義・自由主義を移植いしよくしようとしても失敗するであろうし、なにより現地の民衆にとつて幸せになる道ではないのではないか。イスラムの人々の過激な攻撃主義も困りものだが、彼らの信じるイスラム教を軽んじてはならないのである。軽んじると文明戦争になるほかないであろう。それは、最悪の道だ。

この点の無理解を放置ほうちすれば、アメリカの行動は不当な「占領」だと受け取られ、反抗され、終わりなき混乱となろう。

二 国家の安全保障にいのちを捧げる

以上はすべて、いのちを懸けるといふ場合のうち、一人の間あるいは少数の集団のいのちが、より大きいもの全体、あるいは永遠のいのちの価値に、どう献身けんしんするか、現世のいのちを犠牲ぎせいにするか、というものである。ここでは、より大きな価値として、国民一人のいのちに対して全体たいのいのち、現世のいのちに対して来世・永遠のいのち、という二つの軸じくが考えられている。

このように、一般に人類社会として、「一人や少数のいのち」が、「より大きいものち」のために、あるいは「それを背景とする何らかの高い価値」のために、進んで身を捧げるといふの

は、理解できる行為なのである。

現代、「いのちを懸ける」という場合において、考察すべき最も緊急の問題は、先程も述べた報国、中でも国防という報国の場合である。そして、そこから出てくる問いは、国家国民のいのちの全体のために対して、その部分のいのちを犠牲にするにしても、どんな意味づけでもって、いかなる方法で犠牲にするかである。

二十世紀の日本は、大東亜戦争における未曾有の敗戦を通じて、「いのちを懸ける」ということに関して、大切なことを学んだ。大東亜戦争末期には、米軍による本土爆撃が頻繁となり、米軍による総攻撃に遭って都市の住民が、多数焼け出され、死亡し、おまけに広島・長崎へと不当な原爆投下を二回も見舞われ、死傷者が鰻上りに増加していた。

昭和天皇は、そこでついに、御前会議——天皇ご臨席の下に、重臣、内閣要員、軍関係者で構成するもの——において、「ポツダム宣言」の受諾を認め、一九四五年八月十五日、終戦の詔勅を発せられた。詔勅の文面には、「日本国の滅亡」を危惧するとの天皇陛下の御心が込められていた。

『ポツダム宣言受諾の詔勅』（いわゆる「終戦の詔勅」）には、

その点に関して次の条が見えているのである。

尚交戦ヲ繼續セムカ、終ニ我カ民族ノ滅亡ヲ招来スルノミ
ナラス、延テ人類ノ文明ヲモ破却スヘシ。
斯ノ如クムハ、朕何ヲ以テカ億兆ノ赤子ヲ保シ、皇祖皇
宗ノ神靈ニ謝セムヤ。
是レ朕カ帝國政府ヲシテ、共同宣言ニ應セシムルニ至レ
ル所以ナリ。……

（森清人謹撰『みことのり』錦正社）

言うまでもなく、ここには、一切の根柢に、すべての彼方に、祖国国民としての永久不滅、つまり天壤無窮——天地と共に永遠に窮り無く——という最高価値が存するのであった。

昭和天皇は、日本国民が全員滅亡してしまつては、日本国が滅亡することになり、そもそも戦争をすることに意味がなくなるとお考えになられたのではないか。こう私は推察する。

御製にある。

身はいかになるともいくさどどめけり

ただたふれゆく民をおもひて

ふりつもるみ雪にたへていろかへぬ

松そおおしき人もかくあれ

国民が全滅したならば、国民の永遠のいのちは途絶えてしまう。国民のいのちの伝統は、松の葉のように永久不変に色濃くありたい。一時の占領によって黄色に変色してはならない、と。

松は枯れてはならぬのであった。

大東亜戦争、太平洋戦争、日中戦争においては、大東亜共栄圏という理想を実現することに国家の命運を懸けて、日本は戦っていた。であるとしても、その日本国民全部が滅亡しては、日本抜きの大東亜共栄圏となり、そもそも日本抜きでは共栄圏は成り立たなかったであろう。

一九四五年に戦争に負けて後、欧米植民地からアジア諸国を解放できれば、日本民族は滅亡しても本望である、という類いの考えも一部に無いことはなかったが、それは壮士気取りの感情であり、悲壮感に酔った空想であつたのではないか。

日本は、必ず勝たねばならぬのであり、万が一にも負けてはならぬのであつた。

よしや負けても……「国民全体が滅んではならぬ」のであつた。生き残らねばならぬのであつた。

だから、戦争には、必勝の決意と勝利への慎重な準備とともに、撤退、休戦、和平という、いざという時の事態收拾の戦略が、開戦以前から用意されていなければならなかった。これが国家国民というものの戦略でなければならぬのであつた。

しかし、昭和十年代の日本政府は、なんと和平の仲介役を、帝国主義的野望に燃えたぎっていたあのスターリン率いるソ連に期待するなど、全く判断が狂っていたのである。真の敵を見誤っていた。

国家国民は、必ずや永遠不滅でなければならぬのに……。

視野を広げて、地球儀と人類社会全体の中でこの国家の生存の問題を考えてみよう。そこにおいては、せいぜい「各国ともみな滅亡せずに共存する」ということこそが、皆が共通に認める価値ではないだろうか。

もちろん、国家といつても十億を超える大人口の国から、シंगाポールのように三百万程度の小人口の国までという違いはあれ、ともかくすべての国家国民のいのちが永遠不滅でありたいというのが人類全体の共通価値であり、公理であろう。

多くの国家の根柢には、一つもしくは複数の民族という血縁・文化集団があり、生物的及び精神的な基礎となつて団結する。そうして、国家というものが犯すことのできない価値をも

つ単位なのである。そういういのち集団は、どれも死滅させはならない。

また、現代の低い発展段階にある人類社会には、どれか一つの国民全体のいのちを滅亡させ犠牲にしても、守るべきであるというような「共通至高の価値」は、未だ明確には存在しないのである。一つの国家社会には、それぞれのいのち集団という至高価値が存在する。各国の国防とはそのためのものであり、そのために国民の一部が軍隊としてのいのちを犠牲にするのである。

ただ、世界の各国が相当努力して守るべき共通価値は幾つか存在している。地球環境の保全、各人のいのちとその尊厳などである。しかし、そういう価値を守る義務を各国が忠実に果たさない、というのが現実であろう。特に地球環境問題に共通価値が現れるのであるが、せっかく会議を開いて協定を取り結んでも、各国はなかなかそれを守らない。

現段階の人類社会は、まだ低い発達水準にあるから、各国の国民全体のいのちを少しでも犠牲にするような行為を、各国自身に期待することは容易でない。それは過剰な期待であり、過剰な名誉行為というものであり、期待しても決して効果はあが

るまい。やはり、各国国民は、相当大きな犠牲を払うといっても、自国の国民全体のいのちを全滅させるほどの大きな犠牲を払うことは、事実上、不可能である。

あの広島・長崎への原爆投下の忌まわしい犠牲でさえ、各国民にとっては他人事であって身に痛みを覚え、その後の核兵器破棄に役立ってはいない。悲しいことである。東アジア各地での第二次世界大戦中の戦争被害——日本が全責任を負うものばかりではない——も、同様である。だが、この事態はどうかして乗り越えねばならない。

それには、諸国家の自衛の共存が人類社会の根本原則として、まず各国家が、国家としてしっかりと自身の秩序を固め、自国民のいのちを、各国の相互関係の中で正当な方法で守ることである。それゆえ、自衛が各国の自然権であり正当防衛の権利とされてきたのである。自分は自分で守るということである。

この原則を犯して、外国の国民の、あるいは特定の宗教を信じない異邦人たちのいのちを全滅させてよい、という狂ったイデオロギーに駆られて侵略するような国家国民は、世界中からよってたかつて袋叩きにされるのである。各国には、他国の

国民を滅ぼしてよい自由権は認められぬ。

国家主権は自由・平等・不可侵である。これが現代の国際関係の原理、というより公理である。他国の正当な自由を侵す自由は、いずこの国家にも認められないのである。

ところで、より高い価値に自己のいのちを懸けて献身すれば世間から称賛され、それを、われわれは名誉と言いならわしてきた。それゆえ、真の名誉は、いのちよりも大切な価値の一つであると思われる。いのちより大切なものがある、それが名誉であり、大義である、と。

ただし、このときに懸けるべき「いのち」は、一人ひとりのいのちであり、部分のいのちであって、国家国民全部のいのちでないことに注意しなければならない。

名誉や大義であっても、いずれか一つの国民の「全体のいのち」をその名誉のために捧げる、つまり国民全体が犠牲として滅ぶ、ということは行われ得ないのではないか。

先にも触れたように、実は、人類はまだ、人類全体のいのちを、あるいはどこか一つの国民が全員いのちを、それに向けて捧げるといふほどの、高い価値を見出してはおらず、共有してもいない。「そのような崇高な価値に一つの国民全体のいのちを懸ける」ことを「名誉」とする、というところまで発達して

はいない。

繰り返し主張したい。結局、国家国民にとっては、その国民全体のいのちを永続発展させることが、究極的な価値である。犠牲とされるいのちは、その全体の中の部分のいのちではないのである。

例えば、日本の場合、大東亜戦争中、サイパン島その他での玉砕や、あるいは特攻の兵士に対しては、その人々の勇猛さと忠誠行為を称えるお言葉が、そのときに応じて、天皇陛下から下された。しかし、はたしてその調子で、玉砕が国民に及び国民がいのちを失う状態となるまで、昭和天皇は玉砕や特攻というような「いのちを懸ける方法」を称賛されたであろうか。

断じて、そうではなかったのである。

そうなる以前の、玉砕とか特攻での、一部分の国民・兵士の「いのちを懸ける行為」が称賛されたのは、「国民のいのち」の滅亡ではなく、国民のいのちの救いと戦争の目的達成とに役立つからこそではなかっただろうか。いくら犠牲といっても、全体のいのちに対する部分のいのちの犠牲にとどまる時にのみ、犠牲は意味がある。犠牲が全体のいのちの犠牲になるときには、それは犠牲の許容限度を越えるのである。

幕末に、幾つかの諸藩で一部、白虎隊など、少年兵士たちの玉砕が行われたが、一途で勇敢な行為は称賛されるのだが、悲劇としての側面を拭いきれない。なぜそういう悲劇が行われるのか。それにはどんな意味があるのか。

戦国の世では、玉砕を避けるために行われる撤退は、不必要でも不名誉なことでもなかった。しかし、追い討ちをかけられるので、大きな犠牲を伴う行動であった。それは味方が、次に、あるいは最後に勝つための、永遠に勝つための、一時のやむを得ない戦略であった。ゆえに撤退は、戦略として、死活的な重要性を孕んでいたのである。

秀吉は、よく撤退のための殿軍（しんがり）を務め、信長に認められたのであったという。

国家及び国民の場合、「国民全体のいのちが減ぶようないのちの懸け方」は無意味なのである。国家国民の存在目的は、国家国民の永久不滅ということだからである。それゆえ、感情的に意気がって滅亡の淵に飛び込むではならない。

全体と部分の関係という面で考えると、何かにいのちを懸けるとは、**全体のいのちを生かすことになるがゆえに、その中の部分のいのちのみを懸ける**、つまり犠牲にすることではないだろうか。

結局、いのちを懸けることは、どのようなときに意味があるのだろうか。「全体のいのちを生かすために、その部分のいのちを犠牲にする」という限度があるときだけであろう。懸けるべきいのちとは、全員のいのちではなく、あくまでもその「部分の者のいのち」にすぎないといえるのではないか。

『旧約聖書』を読むと、部族や民族の滅亡物語が結構たくさん出てくる。古代には、全員が玉砕することさえ稀ではない。ある一つの民族が皆殺しにされるといふ悲劇は、世界史上、少なくなかった。しかし、現代、そうした玉砕はよくよくの例外的な結末であろう。

他からの不当な侵略攻撃に抵抗し、全員のいのちを懸けて戦うのは、「不利とはいえ、いくらか起死回生の勝利の可能性」を見込んでのことであり、その結果、不運にして全員が玉砕し、地上の国で滅亡するに至っても、それは人知を超えた不運なのであり、悲劇なのである。その状態に出くわす人々にとつては、それは人為の力ではいかんとも抗しがたい天命であり「宿命」ともいべきものであろう。

ゆえに、国民全体の玉砕について、国民全体のいのちを懸け

ても守るべきものがあるからだ、というふうには言えないか。ば、それは次のように希望するからではないか。

神仏や天が、われわれの正当な戦をお認めになり、千載の歴史において、われわれに栄誉を賜り、われわれをいずこの地にか再生させるがゆえにであろう。

あるいは、この地上の国でなく天国において、来世において、名誉ある地位を約束されるに違いない。

現代でも確かに、「いのちより大切なものがある」という言葉は、まことに重々しい言葉である。それは、ここまで考え、覚悟を決めてはじめて、確実に言える言葉である。そうでなければ、安易で、評論家的で、扇動の言葉に過ぎまい。自分がその現場に出掛けない者の言葉でしかないであろう。

そもそも、自国にとっての戦争の目的というものは、自分側の国民も、また相手側の国民も、その一部のいのちの犠牲を伴いつつも、残った双方の国民全体のいのちがより健やかに生き延び永久不滅に発展することにあるのである。玉砕という状態で自国の全員のいのちを滅ぼしてまで突進することにあるのではない。だから、戦い済めば、敵も味方も仲直りの盃を交わすではないか。日露戦争後に、日本とロシアは敵を称えあった。

また、たとえ運悪く敗残の苦しみと屈辱を受けても、国民全体のいのちは保存し、「七転び八起き」「七生報国」を目指さねばならないのである。血気にはやって、あるいは絶望してしまつて、滅亡に及んではならぬのである。

いのちを懸けるということは、国民のいのちが永遠不滅に生き延び発展してこそ意味がある。臥薪嘗胆という言葉とそれに込められた精神は、それでこそ生きてくる。

終戦の前後、陸軍の一部が徹底抗戦を叫んで、天皇陛下のお住まいになる皇居・宮城にまで乱入したが、仮にその動機に熱誠あふれるものが存したにせよ、やはり血気に逸る一部の者たちの軽挙妄動であつたとしかいえない。彼ら青年将校には、世界情勢など事態の全体の推移が見えなくなつていたのであるか。悲しいことであつた。むろん、昭和天皇のご意志にも反するものであつた。

行為の善悪は動機のみでは決まらない。動機と、目的と、行動方式と、そしてその結果とについて、十分な深謀遠慮が払われたうえででの行為でありたい。

武力や権力を国民から預かるリーダーたるもの、この点を、ゆめ忘れてならじ。

三 何が正義か

——個人と国家から、人類の安全保障へ——

要するに、こういうことではないか。

いのちより大切なものがある、それにいのちを懸ける、という言葉は、全く意味のないものではない。発すべき言葉ではないのかといえば、決してそんなことはない。

いのちを懸けるということは、では、どんなときに意味があり、実行すべきものであろうか。それは非常時ひじょうじにおいてであるが、次のような幾つかの事態じたいである。

まず、懸けるのは、全体のいのちではなく、部分のいのちまでである。

即ち、部分のいのちを犠牲にすることになっても、生き残った全体のいのちが生存でき、存続発展する可能性があるという見通しが立つときである。

特に、先に述べた国民全体のいのちの玉碎ぎよくさいというようなのは、初めから目指すべき目的ではない。そうなるのであれば悲劇であり、できることなら回避すべきものである。

第二次世界大戦後の数多い民族独立戦争や、最近では東ティ

モールなどのように民族独立のために自分のいのちを捧げた人々は、民族全体のいのちの永遠に尽くすのである。

イスラムの人々による自爆テロにも、自己の宗教的な意味づけに基づいて、「自己一人の現世のいのち」以上の大切なものへの献身があると見られる。

特攻とっこうに散華さんげした日本の兵士においては、日本国家の永遠不滅えいえんふめつという崇高な価値たうこうが、各人のいのちよりも大切であると、各自に理解された。否、そこにとどまらず、国家の永遠不滅と自己の魂たましいの永遠不滅とが一体となる、と考えられたのであろう。

人は、自国の国民全体のいのちの自衛・存続と平和発展のために尽くす。国家としての戦争あるいはその他の国際平和活動を行う場合、国民一人一人は、徴兵ちようへいにより、あるいは志願しがんにより、いのちを捧げる。あるいは銃後じゆうごにおいて前線の兵士の行為に協力し、自らも労苦ろうくを厭われない。

国家とは、国民に、国防のためにいのちを犠牲にすることを要求する団体組織ともいえる。その国家の中で国民は、国家という組織団体に対して自己の生命財産の安全を防衛することを要求する権利を持つ。と同時に、国民には国家のその行為に参画さんかくし、自己の生命を捧げる義務がある。

特別攻撃隊に参加して南海に散華した隊員諸氏も、その他の

兵士諸氏も、みな祖国日本の^{いよき} 弥栄を祈り、銃後で待つ自分の両親はじめ家族のしあわせを願った。二十歳そこらの若い身ながら、^{みごと} 見事に国民としての義務と使命を果たされたのである。

いのちを捧げる行為には、殉職、殉死、殉教などのほかに、**個人による自発的な隣人愛の行為**もある。

これは集団あるいは他の個人のいのちを救うために、自己のいのちを犠牲に捧げる行為であり、すばらしい感動的な行為である。

先年、東京の山手線^{やまのてせん}のある駅構内で、線路上に落ちた酔っ払いの人を、韓国人留学生が飛び降りて助けようとし、自分のいのちを犠牲にされたこと——自分が轢^ひかれるとは思わなかったのであろう——があったが、真^{まこと}に心温まる行為ではあった。しかし、それは悲しい事件であった。

できれば、そのような酔っ払いなどのために、大切な留学生のいのちが犠牲にされないほうがよかつたのではないだろうか——ただ、神仏の目から見れば、いのちには、酔っ払い者のそれと素面^{すめん}の者のそれとの間に、区別はないのかもしれない。私には分らない。

ともかく、国で帰りを待っていたお母^{かあ}さんの悲しみは、いか

ばかりであつたろうか。英雄的^{えいゆうてきこう}行為でも、いのちは無駄^{むだ}にしてはならない。もしも、この世のことが一切^{いっさい}、万能の神仏のなさることとすれば、なぜ神仏はこのような事件を起こされるのであろうか。

安全管理に責任のあるJRは、速^{すみ}やかに駅のホームの作り方に安全上の改善^{かいはん}を^{ほどこ}し、ホームの自動販売機で酒を売るなどの愚行^{ぐこう}を^{げんきん}厳禁したか。

国家というものの価値の内部では、国民として、それにいのちを懸けることが名譽^{めいよ}であるが、それを超えて最後に考えていくべきものが存在する。グローバルな「人間の安全保障」——国連の新しい考え方——の場合である。

国連における「人間の安全保障委員会」は、二〇〇三年、『人間の安全保障』(Human Security)という考えを報告書の形に纏^{まと}め、アナン事務総長に提出した。これは緒方貞子氏とアマルティア・セン氏が代表となつて作成したものである。

人間の安全保障とは、国家による国家の安全保障・国防を否定するのではない。しかし、国防においては扱えない、それを補^{おぎな}う領域での種々の安全保障を指す。すなわち、「人間の生^{せい}にとってかけがえのない中枢^{ちゆうすう}部分^{ぶぶん}を守り、すべての人の自由と可能性を実現すること」をいうのであり、「人間の基本的自由

を擁護し、広範かつ深刻な脅威から人間を守ること」である。
 『安全保障の今日的課題』朝日新聞社、二〇〇三年、一〇〜一
 一ページ、ルビ追加。）

これは先年、ノーベル経済学賞を受けたインド出身のアマル
 ティア・セン博士の哲学を多く取り入れた考えであるが、従来
 の「国家の安全保障」が国防中心のものであるのに対し、環境
 汚染、国際テロ、大規模な人口移動、エイズなど感染症の危
 険、人権の抑圧、困窮など、人間のいのちを脅かすものすべ
 てを指す。

これらは、従来型の国防というものと重ならない性質のも
 のである。人類世界の各国家と国際機関は、国防という安全保
 障活動に加えて、こうした新たな種類の安全保障に取り組み
 ばならない所に来ている。アフガニスタンやイラクに関して
 は、特に国際テロをいかに防止するかという人間の安全保障が
 かかわっているのである。

これからは、新しい人間の安全保障に対する献身ということ
 が、戦争防止の他にも、いのちを懸ける課題となってくる。

従来の紛争解決や治安はもちろん不可欠であるが、さらにそ
 れを越えて環境保全、飢餓の克服、医療、教育などへの貢献活
 動の場合がそれである。これはグローバル時代になり、人類の

一体感が高まる中で、理想として徐々にできあがりつつある人
 類感情に基づくものであろう。

われわれ人類は、国連において、軍事・治安を含め、環境、
 雇用、食料、医療、差別克服、教育など、「人間の安全保障」
 ——地球的なセーフティーネットの確保——という新たな考え
 を開始した。われわれは、そのためにこそ、「いのちの犠牲」
 を払わねばならなくなってきたのである。それにはもちろん、
 初めから必ずしも戦死や事故死などのような死という形のいの
 ちの懸け方ではなく、他にいろいろな形がある。

この地球的な人間の安全保障は、どこか外国での問題であ
 る、自国の国益という形の「部分のいのち」より価値の低いも
 のだ、ということとはできない。今はまだそうでもないが、地球
 的安全保障への献身は、人類社会において最高の名誉に近づい
 ていくものとなる。

単なる国益だけにいのちを懸けるのは、水準の低い名誉だと
 いうことになっていくであろう。

もちろん、こう言ったからとて、各国の国益を否定するの
 はない。かえって、国益を実現するために必要な哲学を述べて
 いるのである。人類の現代社会では、正当な方法によって主張

される「各国の国益の共存」ということが、最小限度、基本的な原則である。国際関係における国家主権の不可侵と主権平等^{どう}、互恵^{ごけい}というのはこのことを意味する。

人類社会の歴史の現段階では、各国の国益が最も明確であり、その中心は、自国民のいのちの永遠不滅である。各国にとっては、この意味の国益の追求が第一目的となる。しかし、その実現の方法は、国防を土台^{どだい}としつつも、より広範^{こうはん}な人間の安全保障というものと不可分に組み立てねばならないのである。

例えば、石油産出^{さんしゅつ}地帯での紛争^{ふんそう}の解決は、人間の安全保障の重要問題であるが、同時に日本にとって石油の安定供給という経済的な国益実現のために不可欠の課題である。国益第一か、それとも紛争解決か、どちらか一方の考えだけを分けて扱うことは、成り立たないのであって、紛争解決が国益につながるのである。

それゆえ、今や軍事的意味の「国防」や「自衛」という考えそのものに止まるのでなく、それを乗り越えねばならない。軍事か他かは、目的のための手段の区別にすぎない。

日本での憲法論議^{けんぽうろんぎ}は、「個別的自衛権か集団的自衛権か」という古い論議の枠組みに足踏^{あしぶみ}みしている。そこからもう一歩先

に進んで、この意味での「安全保障」というものを、考えねばならないところに、われわれ人類は、到達^{とうたつ}しているのである。当然それは、一国の範囲と力量を超えるから集団的であり得ない。

われわれは、「国防」とか「自衛」のみではなく、国防も含め、「人間の安全保障」というより高次^{こうじ}の目的を立てねばならない。それは当然、各国個別的なものでなく、集団的なものであるから、個別的自衛を越えて、「集団的な人間の安全保障」が必要なのである。もはや、国防とか自衛という概念だけでは、時代遅れとなりつつある事実を、われわれ日本人は知らねばならない。

あの野口英世博士^{のぐちひでよはくし}（一八七六一一九二八）は、残念ながら研究対象の黄熱病^{おうねつびょう}に斃^{たお}れた。そのいのちの懸け方は、戦争におけるいのちの犠牲つまり戦死ではないが、やはり立派な犠牲であった。侵略^{しんりやく}から祖国を守る、国際紛争を解決する、という平和論だけでは視野^{しや}が限^{かぎ}られる。国防・自衛を基礎にしながらも、それを越える活動を、われわれは視野に入れなければならない。それが人道支援^{じんどうしえん}というものである。

自衛隊がイラクに出掛けるのは、一面でアメリカなどの仕掛けた戦争の復興^{ふっくう}という人道支援ではあるが、それを超えて人間

の安全保障という意味を帯びるものなのである。綺麗な水の供給、病院の再建、学校の再開、雇用の供給…がそれである。

こうしてみると、はじめに述べた「いのちより大切なものがある」という主張は、確かに人類社会において、うなづけるものを含んでいる。

次のように問うべきだ。

- ①それはどのような場合のことか
 - ②何に懸けるのか
 - ③いのちとは誰のいのちか
 - ④どれだけの数のいのちか
 - ⑤どんな方法で懸けるのか
- われわれは、こういうことを正確に検討し、それぞれの場合のために準備をしておく必要がある。ただ漠然と「いのちより大切なものがある」というだけでは、われわれの行動を正しく有効に促すために、有益でないのである。

日本国民は、大東亜戦争に敗れてこの方、ずっと一國平和主義に安住し、こういう方面の制度作り、心作りに欠けた。感傷的に、「人のいのちは地球より重い」などというような言葉に酔う奇妙なゆとりは、人類には残されていない。その間に、多くの生命が地上から消え去った、今も消え去りつつある。ど

ういうときに、どうするか、われわれは広く考えて準備しておかねばならないのである。

われわれは、決して臆病風に吹かれてはならない。危ないところには出向かない、お金で済ます、安全が保障されるようになれば、非戦闘地帯にのみ、人道支援に出掛ける。これでは人類社会の一員たる資格はない。国際紛争の解決のために、武力を用いないことは理想であるが、有効ではない。危ないことに近寄らないという臆病風に吹かれて、それを包み隠し弁解する理屈として、非武力主義に逃げ込んではいならない。

われわれは、個人であれ、国民であれ、「いのち」という最もかけがえないものを捧げるについては、日頃からよく考慮を巡らし、いざというとき過不足なく迅速、的確に行動できるようにすべきだ。思想を整理して体系化し、法も武力も整備して、行動への覚悟を決めておかねばならない。

勇氣と慎慮は二人三脚。ともに歩み、また慎慮は勇氣に導かれてこそ、偉大な功績を挙げるのである。率先、善を認め、勇を鼓して貫く、と言われるのである。

四 慎重な思考実験を通じて歴史を創造する

昔、東北生まれの詩人、高村光太郎さん（一八八三―一九五六）は、「僕の前には道はない、僕の後に道はできる」（『道程』）と書いた。これは真に意味深い言葉ではないか。このノートでも何度か引き合いに出している哲学者ヘーゲル先生は、こう述べた。

「われわれの歩んだ跡を振り返ると、そこには一本の足跡の系列ができる。それはもう出来てしまった系列であり、他ではありえず、それでしかあり得ない、必然の系列である。しかし、われわれのこれから歩もうとする前方には、いろいろな道が可能である」と。

未来とは、自由な選択を通じて創造できる希望の領域である。

確かに、ある個人の未来は、百パーセントではないが、その個人の意志により、個人の選択によって決まるといえる。個人の「意志・行為」（因）と、「その結果」（果）との関係は、過ぎゆく時間の流れをつたう一本の縦のつながりであり系列であり、必然の系列である。

ところが、こうした縦の因果必然の系列には、突如、予想外に横から「縁」というものが加わる。出来事は、「偶然」とし

て発生して来ることになる。われわれ人類の歴史には、偶然の事件がつきものなのである。一体、偶然とはどういうものか。

私が、ある時、ある友人の家を訪問しようとしている、と仮定する。その建物は瓦葺きの家である。ところが、その屋根の瓦の一つの留めクギが緩んで、今にも落ちそうになっている。その建物は建ててから相当の年数が経ち、古くなっているからである。そのことには、私は全く気がつかない。これは物質の当然の変化であり、必ずそうなるという「必然」——原因から結果への——なのである。

そこに、私が、所用があつて友と時間を打ち合わせ、その家を訪問するわけである。これも理由のある行動であり、打ち合わせの結果であつて、私としては必然の因果系列上の行動である。

そして、ちょうど私が屋根の下に差しかかったとき、その古い瓦が、私の頭の上に落ちて来て、私が怪我をする。あるいは、瓦は頭を避けて私の体の一メートル先に落ちたとする。私はそれがショックで失心し、転んで頭を打ち、すぐさま入院となった。

ところが、話はこれで終わらない。しばらく入院している間

に、これまでいつも研究の上で考えに考え続けていた問題について、すばらしい着想を得た。入院とは、毎日忙しい日程で動き回っていたときに、それを中断して強制休養をさせられることであり、そうした休養はしばしば「よい発想」をもたらす。

発明とか発見、新たな着想というものは、日頃の考え方が中断されるときに沸き上がることが多い。風呂に入っているとき、犬を連れて散歩しているとき、あるいは普段の仕事ではなく別の働きをしているときなどに、良い考えがフツと浮かんでくる。もちろん、ずっと同じ問題を「考え続ける」ということが基本になければならない。思索によって、自分の深層心理の内部に情報が蓄えられていなければ、情報の組み替えや合成は起こらないのである。積小為大といわれるが、毎日の小さな行いや努力が飛躍を産出するのである。

偶然の事件は、マイナスばかりとは限らず、プラスのこともある。マイナスがプラスを産むこともある。幸運とは、そのような種類の恵みである。

さて、前半の瓦事件は、私にとって「思いもかけず」突発する出来事であり、これは偶然ということになる。私の事件は偶

然の出来事であり、この偶然は、「瓦の落下」と「私の友人訪問」という「二つの異なった必然の系列の出会い」として起きる事件なのである。

私にとっては、瓦が落ちてくるという出来事は偶然であり、私自身の因と果の系列に対して、予想しない一つの別の系列、つまり縁がぶつかるわけである。この偶然は、私の一本の必然の因果に対して、別の必然の系列が縁の要因として外から加わってくることによって、「思いもかけず」生じるものである。

われわれ各人の人生にも、それをたくさんの人について集めた人類の歴史にも、このような偶然と縁というものが付きものである。

かつて、日本の哲学の歴史上に、京都大学教授で、九鬼周造という哲学者がいらっしやった。先生はフランス哲学と日本文化を専攻された。『偶然性の問題』（岩波書店）という書物を書き著し、「偶然とは必然と必然との出会いである」と述べておられる。先生は、日本文化の「粹の構造」というものについて、これまで粹な思索があり、それも先生の今一つの見逃せぬ功績である。

人の一生では、一つの業績を挙げることさえ容易でないのに、才ゆたかに悠々と二つもの業績を挙げて逝かれるとは、幸

運かたなお方かたである。そうした「人生の幸運」というものは、必然であるのか、はたまた偶然であるのか。

歴史とは、夥おびただしい数の偶然の「出合」であり、難しい言葉で言えば選かひ合あである。

われわれは、計り知れない偶然状況の中で、瞬しゆん間かん瞬間、どうするか、こうするか、右か左か、どの道に進むかと、頭の中で「思考実験」を行う。そして、物事を自分自身の意志で選択しながら、人生を作り、歴史を作るのである。

ここで、皆さんとともに、国際テロと戦争という現代の課題を引き受け、頭脳において、そういう思考実験を試みてみようと思う。日本国民は、日本の外交は、日本の国家政策は、この思考実験がどうもお得意とくいでないようであって、もっと訓練くんれんが必要なのではないか。

ところで、日本民俗学たいていの泰斗たいと、柳田国男先生（一八七五―一九六二）は、もともと農政学のうせいがくから出発し、全国各地を隈くま無く旅行した人である。先生は、各地方を歩きながら、歴史というものについて、はっとするような鋭すずい観察かんさつを残された。

これは「涕てい泣き史し談だん」と題だいし、日本人の「なく」ということ

についての歴史上の変化に注目したものである。今日（昭和十六年、一九四一年当時）の日本人が「なく」という行為をかなり忘れてしまったのではないか、また、「なく」という幅はばの広い現象に「泣く」というような漢字を当あて嵌はめたために、もとの広い範囲の内容を含む行為が、特定の狭せまいもの、つまり悲しみの表現ということに変わってしまったのではないか、という問といかけでもある。

ここで、なぜこんな問いを提起ていするかというと、歴史感覚というものについて、一般人に警鐘けいしやうを鳴ならすためである。われわれの犯おぼしやすしい二つの弊害へいがいがあると、柳田先生は、次のように述べている。

第一の弊害はこうだ。歴史の行程こうていでは数多くのものが移り変わるが、「古今一貫ここんいつかんもしくは永代不易えいたいふよぎのものが必ずある」のである。「何もかも、時さえ経過けいすればみな無差別むさびつに改あらたまってしまふものと速断そくだんすること」は誤りである。何と何とが変わらなものであるかを明らかにし、変わるものではその変わり方を学ばねばならないのである。

第二の弊害は、「いわゆる歴史の偶然ぐうぜんを無視する点である。すなわち古今の変遷へんせんは実は幾通りいくどおもあり得たのに、何らかの事情によって、その中のある一つの道を通して来たのである。

それをこうしか変わりようがなかったのだ、ときめてしまふ態度が再批判されねばならない。人は何かというと『成るようにはかならぬ』といたがるのであるが、……

こんな愚かなあきらめを棄てさせるためには、できるだけ具体的筋道、すなわち成功と失敗のちがいを、並べて比較しなくてはならぬと思う。』（『柳田國男』ちくま日本文学全集、一九九二年、筑摩書房、三〇五ページ、改行、ルビ追加。）

われわれは、今ここに、「現代の歴史」を創造する渦中を歩んでいる。この歴史は、過去の既に起きてしまった道としての歴史ではない。未だ現れていない道であり、新たに創造されようとしている歴史であり、いわば未来からの歴史であるが、それはすべて偶然状況の中で作られる歴史である。

しかし、それは、全く当ての無い「出たとこ勝負」の創作かと言え、そうではない。それは、いわば、われわれ自身の精神から「思考実験」を通じて、われわれ自身が心の中で産出する歴史である。すなわち、われわれが、今置かれた状況において、「自ら頭の中で」さまざまな要因を、因も果も縁もみんな組み合わせ、どのように新たな人類社会像を設計し、実現する段取りを組み立てるにかかっている。それは、われわれが、意志をもって創造する心実であり、実現したい「希望の中

にある歴史」なのである。

希望や志は「大義」にかなってはいなくてはならない。ところで、二〇〇三―四年にかけて、イラクへの自衛隊派遣について、大義など不要である、大義など存在しない、国益が第一である、国益と力だけが派遣するかしないかの理由づけである、というような単純で割り切りすぎた論説があった。けれども、そんな議論は無茶であり無理というものではないか。

いやしくも、国家の行動たるや、やはり有理なもの——理のあるもの——でなければならぬ。正当な理由がなければならぬのである。日本人は、自分の国益しか頭にない利己主義の集団でいいのか。そんなことはないであろうし、決して、そうではありたくない。

日頃から「大義」というものについて、議論を戦わせ、体系的な哲学を持っていないならば、新しい事態が出来たとき慌てふためくことになる。そういう意味で、日本の新聞の論説にも、それを書く記者諸兄にも、慎重で体系的な思索を希望したいものである。

われわれは、二〇〇一年九月十一日のニューヨーク世界貿易センタービルでの九・一一テロ事件以来、「新しい戦争」の時

代に突入した。これが国連はじめ世界の大方の見方である。

ここで「新しい」という意味には幾つかあるが、その一つは、戦争が国家と国家との間のものから、国家でないテログループと国家（群）との戦争になったという意味である。

しかし、もう一つ、通常の戦争は宣戦布告を行うのに、テロではそうでない、ということがある。これまでの通常の戦争では、宣戦布告がなければ卑怯な騙し討ちと批判にさらされる。国際条約のうちの戦争法規でも、宣戦布告が謳ってある。

遠い昔、一九四一年十二月八日の日本の真珠湾攻撃がいつまでも「卑怯な騙し討ち」として引き合いに出されるのは、そのためである。今ここでは主題から外れるので、日本の宣戦布告問題は論じない。他のところで述べたので、そちらを参照してほしい。

戦争の現場では、奇襲、夜襲、奇策、騙し討ち、みな当たり前なのに、国家と国家との通常の戦争——国連による武力行使を含めて——の「始まり」では、卑怯は許されない、というのが建前である。宣戦を布告するというルールを設けるのはなぜか。相手も反撃の準備をするから、双方の被害が少なくなるとでもいうのであろうか。現実には、どうもそうとも思えない。

宣戦布告ルールとは、せめてもの戦争抑制のためのルールなのであろうか、あるいは何のためなのであろうか。

それに反し、建前も何もなく、宣戦布告なしの、したがって「奇襲」こそが原則であるべきなのが、まさに「テロ」である。ゲリラもレジスタンスでも、みな同じである。テロがテロであるためには、宣戦布告や攻撃の予告を行ってはならない。テロの生命線は、恐怖を煽ることにあり、そうであればこそ有効であるのであって、完全な奇襲でなければならぬわけである。

新しい戦争という意味は、そういう「テロを相手とする戦争」だということにある。たまに、テロの予告が行われることもあるが、それは相手に対する一般的な脅し、恐怖を煽る効果を狙うからである。

本当に5W1H、つまりいつ、どこで、誰に、どんなやり方で：などということをも、具体的に予告する訳がない。江戸城の桜田門外で大老井伊直弼を襲った水戸浪士によるテロでは、むろん、予告などはなかった。

テロは、攻撃される側からすれば、全く予期できない偶発的な突発事件なのであるが、しかし、テロ側からは、狙い定めいのちを懸けた必然の行為なのである。

このように、人類の新しい時代は、新しい意味のテロ戦争を用意する、いなむしろ、「新しい意味の戦争が、新しい意味の時代を切り開く」というほうが、歴史の運行に即しているだろう。悲しいことに、戦争は人類文明の父母——あるいは継父母——である。

二十一世紀初頭、人類世界の戦争は、新しい質、新しい関係のものに変身した。すなわち、従来の国家と国家との間の武力紛争としての戦争から、国際的なテロの実行と、そのテログループへの対抗、という「テロ対国家」の関係での戦争へ、という変身である。

このことの裏には、武器の小型強化と、情報機器の発達による国境を越えた通信ネットワークの拡大とがあつて、安全保障の力学が複雑化したのである。

例えば、火薬爆弾だけでなく情報爆弾も、遠隔攻撃だけから自身を投じる自爆も、材料も方式も増えているのである。有線電話に比べ、ケータイの発達と普及は、テロ実行者の間の連繫プレーを支える。テロも戦争も、科学技術の発展と密接な関係がある。

五 新しい戦争倫理

——先制攻撃論に大義ありや——

二十一世紀の新しい戦争の時代は、まず、アフガニスタン舞台に出現した。二〇〇一年の九・一一テロの後、国連決議を背景に、すぐさま十月七日、アメリカ主導——英国など協力国あり——でアフガニスタンへの攻撃が始まり、タリバン政権を攻撃し打倒した。アフガニスタンが、二〇〇一年の九・一一テロを起こしたアルカイダ・グループの温床であると、アメリカ大統領が見做したからである。しかし、アフガニスタン攻撃の場合には、国連安全保障理事会は、攻撃を支持する決議を行ったが、イラクに対してはそうではなかった。

決議一三六八（二〇〇一・十・五）は、このようにいう。

あらゆる手段により、テロ行為に起因する国際間の平和と安全に対する脅威と闘うことを決意し、国連憲章に従った固有の個別的あるいは集団的自衛権を認識し、（下略）

（国際連合ホームページより、<http://www.unic.or.jp/new/pr01-78.htm>、二〇〇四年七月七日、ルビ追加、訳文一部修正。）

また、決議一三七三（二〇〇一・十・五）は、このようにいう。

各国に対し、協力の強化、および、テロに関連する妄当な国際条約の完全な履行を通じてたものを含め、テロ行為を阻止し、取り締まるために緊急の共同作業を行うよう求め、（下略）

（同ホームページより、<http://www.unic.or.jp/new/pr01-84.htm>、二〇〇四年七月七日、ルビ追加。）

*編集者註：現在、前記二ページは国際連合広報センターの別ページに移動しています。

アメリカのブッシュ大統領は、二〇〇一年十月八日、アフガン攻撃に当たり、こう宣言した。

米軍は、アフガニスタンのアルカイダのテロリスト訓練キャンプ、タリバン政権の軍事施設に対する攻撃を開始した。標的が慎重に選定されたこれらの攻撃の目的は、テロリストがアフガニスタンを作戦基地として使用するのを防ぐことであり、タリバン政権の軍事能力をたたくことである。（下略）

（http://www.rescuenow.net/today_line/topnews/0110/011008bush.html、二〇〇四年七月七日）

*編集者註：現在、当該ページは既に削除されています。

元来、アフガニスタンのタリバンとは、一九八〇年代初めのソ連による不当な侵略以来、混乱に覆われていた祖国を再建しようとしたイスラム青年学徒たちであった。まじめに厳格なイスラム信仰の実践に打ち込むことから出発してできたグループであり、初めは国際テロと結び付いてはいなかったといわれる。

だが、いつの頃からか、テロ集団アルカイダを指導するオサマ・ビンラディン氏がアフガニスタンに入り込み、やがてタリバンの最高指導者ウマル師と昵懇になり、アフガニスタン政権が積極的に国際テロの実行や支援に突き進んでいった。タリバンは、あのバミヤンの大仏遺跡さえも、偶像崇拜などの理由で砲撃し破壊し去った。

アフガニスタンの国民は複雑な関係をもつ多くの部族からなるが、人々は目下、「ロヤシルガ」（国民大会議）を結成して、部族間の対立を乗り越え、部族の武装解除を行い、民主的な国民政権の構築に取り掛かっている。どうか成功を祈りたい。

タリバン打倒には、テロの最初の被害国アメリカの不退転の意志が、国連決議を経由して、決定的に働いた。それなくして

アフガン攻撃は行われなかっただろう。

アメリカの指導者と国民は、いつもこういう国難のときには見事に結束し、速やかな行動に打って出る。一九四一年のパールハーバーの昔を想起するまでもない。日本とは大違いである。

日本はやれ憲法だ、法律をどう整備するか、などと泥縄式の議論を五十年間も、毎度繰り返してきた。

孔子先生は「過ちては則ち改むるに憚る勿れ」と教えられたが、どうも日本人は個人としてはこれを率直に実行するが、しかし国家・国民集団となると、この教えが身につけていないのかもしれない。戦争も、そして平和も、人間の意志から生まれる。意志をしっかり持たねば何もなし得ない。

さて、以下は、九・一一（二〇〇一年）以来の近過去に関する私の思考実験である。しかし、これは後悔ではない。近未来の世界を創るために日本は何を為すべきかを考えるのである。

もし仮に、日本がテロ攻撃を受けたのであったとせよ。日本は、到底アフガニスタンを攻撃することは「なかった」であろうし、そもそも「できもしなかった」であろう。日本国憲法の第九条で、国際間の紛争解決方式として国家による武力行使は禁じられている、と思っっているからである。また、航空母艦さ

え持たぬから、実力としても日本の今日の自衛隊は、物の役に立たなかったであろう。それは、ひとえに、一九四六年発布の日本国憲法の第九条の規定がそうさせるからである。

敵国の武装艦船が、日本の領海を侵略して攻撃を行って逃亡するとき、それを追跡しても、相手に領海線を越えられると、追跡を断念しなければならず、そこでの武力行使も停止しなければならぬとされる。半世紀も前に、日本を無能化するための日本国憲法の所以である。国家と国家との間の戦争という旧時代の戦争観念に縛られ、しかも非武装論に立つものである。

二〇〇二年九月十七日、ピョンヤン会談で北朝鮮の金正日氏が認めた日本人の「拉致事件」も、新しい戦争、テロの一環、という意味合いを帯びている。あれからもう一年経って師走だというのに、解決の糸口は少しも見えてこない。政府の対策も埒らない。（二〇〇四年三月十六日記）

これまでの戦争観念に基づいて、下手に相手国基地に爆撃でもすれば、拉致された人々とその子供たちが、爆撃対象点に連行され人の盾とされかねない。日本の方にミサイルが飛んでくるかもしれない。日本は防衛すべがなく、反撃もできない。

どうか北朝鮮の指導層よ、「柔和なる者が地を継ぐ」という

教えを、国民のために反芻して欲しい。戦争にでもなれば、同盟に無意味な犠牲者が多数出るだけだろう。

これも思考実験であるが、そもそもこの問題では、米、中、ロ、韓国、北朝鮮、日本の間の「六カ国協議」において、アメリカ・中国が主導権を握り「核兵器不拡散」だけが議題とされた。日本の目論みが外されているのである。日本外交における「普遍的理念の欠如」という歴代の宿痾が、今回またしても露呈したのである。政権政党と外務省、しっかりせよ、と言いたい。

日本が、議題を核兵器に限定せず、もっと広く対イラク問題と同様の基準を採用し、「テロ実行を始め、大量破壊兵器を蓄え、人権抑圧を行うような危険国家」を制圧するというように包括的な議題をもって協議の場を設定したならば、より有効であったろう。

日本はそのように、同盟国アメリカを強く説得し、中国、ロシア、韓国も説得すればよかった。そうしてかかれれば、拉致問題が日本と北朝鮮という二国間問題であるとして、六カ国協議の蚊帳の外に置き去りにされることはなかったであろう。

もっとも、国連において、中国、ロシア、ベトナムなど元・

現の社会主義国が人権問題として拉致問題を取り上げることには難色を示したとも伝えられるが、日本の友好国として、中国の振舞いは解せない行動であり、日本として残念である。それは国連を骨抜きにする行動ではないか。友好国ではあり得ないのか。

首相も、外務大臣も、国連大使も、そして政府への外交アドヴァイザーさんたちも、外交にもっと知恵と汗を出して欲しい。この点の思考実験は、死活的な重要性を持つ。

アメリカのブッシュ大統領は、二〇〇四年秋の大統領再選のための選挙の前に、二〇〇三年十二月現在、北朝鮮にエネルギーと食糧援助さえも行おうか、というふうには、初めの厳しい姿勢から後退しつつあるやに見える。まさか、「君子、大統領、豹変す」ではあるまいが、イラク問題だけでも荷が重いから、東アジアの問題はできるだけ簡単に片づけたい、それに中国を刺激したくない、という思惑もあるからなのか。

日本は、一九七一年のニクソンショックの際、米国より、対中国との関係で、頭越しの外交をされた。ニクソン大統領は、同盟国日本に相談なしに、米中国交回復を行った——国交回復自体はよいことであったが。小さな同盟国日本など相談相手にされなかった。

他のところでも述べたように、真珠湾攻撃直前の日米交渉では、アメリカは突如、それまでの交渉経過を逆転し、手のひらを返して、日本が到底呑めない「ハル・ノート」を突き付けた。

アメリカは、第一次世界大戦後にせっかく国際連盟を作っておきながら、自分は加盟しなかったし、第二次世界大戦後の一九四五年にサンフランシスコで調印し発足した国連をも、今また軽んじるようになった。地球温暖化についての「京都議定書」にも自分の国の産業に都合が悪いといって背を向けた。万国に通じる普遍理念を掲げるのもうまいが、所詮は国益中心でしか行動しないのもまた、アメリカなのである。

普遍的に見える理念を掲げるのは、それが自分の国益を獲得するための方便であるからなのか。時折、垣間見えるアメリカの指導者としての豹変ふりは、積年の通弊なのであろうか。アメリカと付き合うには、このあたりの呼吸も心得るべし。

同盟国日本は、アメリカという金魚にとつての糞ではあるまい。歴史の道の作り方において、日本はもつと上手になりた。未来の思考実験のために、今、二〇〇三年師走現在で、進行状況を次に記しておく。

二〇〇三年三月二十日、アメリカは、アフガンに次いで、イラクへの「先制攻撃」に踏み切る。イラクが大量破壊兵器に ついての国連による査察にも非協力であり、かつ国際テログループへの支援基地にもなっている、というのがその理由である。これは、新たな戦争哲学による戦争実践といわれよう。

アメリカ大統領ブッシュ氏は、勇敢にも、「ネオコン」(the neoconservative || 新保守主義者) の先制攻撃論に導かれて、フセイン氏の支配するイラクへの攻撃を決断し、海外からの多数の反対を強硬に押し切り、国連に頼らず、米英独自に、三十数カ国とともにイラク攻撃に入った。

このときも、祖国の歴代指導者と同じく、ブッシュ氏も、自分たちの行動を正当化する宣言を明確に述べた。その点では、自信に満ちていた。

先制攻撃論とは、一國行動主義を辞さない断固とした新戦争哲学である。すなわち、相手が大量殺戮兵器を保有し、世界各国に対して国際テロをはじめ、危険な行動を準備しているときに、国連安保理事会の新たな決議を待たずともなく、ある国が単独あるいは他国と連合して、その相手を封じ込めるため、独自に「攻撃」してよいのであり、それは正当防衛として認められる、と。

これは一つの「新たな戦争神話」の創造といつてよい。

とはいえ、これは決して突拍子な哲学ではないだろう。「自分の身は自分の実力で守る」(自力救済)という古くからある国家の正当防衛論に根差すものであって、対テロ戦争を機に、戦争開始ルールがいわばそこに「先祖帰り」したものである。また、その新しさとは、国連というものができて、その中で集団安保体制において——安保理決議を得て——それを突破する「単独先導」的、かつ集団的な行動主義であるところにある。

「生ぬるい奴らはどうでもよい、俺がやる、お前ら付いて来い」と、粋な「ガンマン」姿が、ブッシュ氏にはダブる。

アメリカ国民がどこまでその支持を続けるか、見物である。アメリカ国民は熱しやすく冷めやすい。アメリカ民主主義は祭り民主主義であり、政治家を「使い捨て商品」にして来ているから、国民はやがてブッシュ氏にも飽きが出てゴミ箱へと放棄する恐れなしとしない。

南部出身のブッシュ氏は、イラクへの攻撃に際して、次のように述べて、武力行使の正当性を力説した。

イラクの場合、国連安保理は一九九〇年代初めに決議六七八と六八七の下に行動した。両決議は、今でも有効だ。米国とその同盟国はイラクの大量破壊兵器を除去するための武力行使を認められている。これは権限の問題ではない。意志の問題だ。……

安保理常任理事国の中には、イラクに武装解除を強制するいかなる決議案にも拒否権を発動すると公然と表明した国がある。……

国連安保理は責任を全うしてこなかった。それゆえに、われわれは、われわれの責任に応じて立ち上がる。(下略)

(http://www.sankei.co.jp/databox/iraq/sp.iraq_01.html 改行、句読点、ルビ追加。)

これこそが、先制攻撃論の立場である。このとき、安保理で拒否権をちらつかせたのは、どの国か。どうやら、そこには、近代の世界秩序の覇権を争うアングロサクソン系のイギリス及びアメリカと、それに対抗するラテン系のフランス——またそれに対抗したり便乗したりするロシア、中国——との地殻の擦れが潜んでおり、それが地割れのように口を開けたわけである。この対立軸は、忘れてはならぬ。

こういう先制攻撃という行動は、アメリカならずとも、これ

からも発生する可能性がある。国連安保理に、五カ国だけが保有する「拒否権」という民主主義に反する制度があり、単独で行動し得る超大国が存在し、他国から反撃されることがない限り、先制攻撃の可能性は十分にあり得る。

国連の枠内でさえ、右に示したアメリカ以外の国々で核兵器を保有する国々には、周辺地域に向かって先制攻撃を行う可能性なきにしもあらず。ロシアに、中国に、そしてEUにも、自重をおすすめしたい。

先制攻撃論を乱用すれば、世界はジャングルの無法世界へと逆戻りし、二十一世紀の安全保障体制は崩れ去るだろう。今回イラク攻撃に踏み切った米国だけでなく、すべからず核兵器を保有する他の大国諸君には、将来にわたり良識と自制を期待したいところである。

六 同盟主義か国連主義か

世界史の精神の発展には、温故知新という作用が含まれる。

大昔に『ハンムラビ法典』は、「目を傷られたらいのちを取るまで復り返せ」というように、限り無く報復することを禁止し、「目には目を、歯には歯を」というところまでで、報復を止めなさい、と教えた。われわれは、これを温めこれを思い出

す。

だが、アメリカが新たに唱えた先制攻撃論は、限定線は設けない哲学であり、古来の限定報復論を事実上打破するものである。敵のテロによる味方側の犠牲者数に対し、相手側の犠牲者は幾人までにせよ、などとはいわない。二千有余年を経て、それが進歩かどうかは分からないが、新たな倫理基準の設定と見做すことができる。

しかしながら、先の第八章でも言及したが、テロに対する行動が報復であり、

「怨みに報いるに怨みをもってす」

ということであるならば、世界一の実力を誇る高貴なるアメリカ帝国といえども、その名譽は損なわれよう。やはり、

「怨みに報いるに徳をもってす」(『老子』六二)

という東アジア古代における老子の指針を、ブッシュ氏にも、お伝えしたいものである。もちろん「敵を愛しなさい」という二千年前のイエスの言葉は、耳にタコができるほどに、ブッシュ氏も子供の頃から聞かされて育っていらっしやる筈。

ただし、少し寄り道になるが、次の点を注意しておきたい。孔子は、老子の見解と異なる指針を述べ、老子の見解を補っている、ということである。

孔子曰く、

四) 「直を以て怨に報い、徳を以て徳に報ゆ」(『論語』憲問第十

これは、まず怨・不正、不義に対しては正義(真つすぐな正しさ)で対応し、正と義以上の行為には徳で報いる、という意味であろう。不正義、理不尽な行為には、正義の標準をもつて然るべき処罰なり報復なりを与えて、そういう行為を抑止する。そして、正義以上の慈愛の行動には、やはり慈愛で報いる。非道に対してそれを正すようにせぬならば、個人は墮落し、社会は乱れる。

孔子のこの基準は、調整的正義を欠いてはならぬ、との警告である。愛だとか慈悲という単なるお人よしの気分だけでは、社会の秩序は保てない、というのである。心すべきことである。これは先の老子の言葉の不充分さを補う考え方ではないか(諸橋徹次『中国古典名言辞典』講談社、七一ページ参照)。

世界史の現段階において、神人でもなく聖人でもなく俗人・凡夫であるわれわれ人類では、「武未だ止むを得ざる手段なり」であつて、武は必要悪なのである。

しかし、武は、怨みの心をもってではなく、常に愛の精神をもって、行使されねばならない。必要悪たる武力行使は、精神上は徳でもつて報いる行為として、意味づけるのでなければならぬ。要は、それを単に知識として弁えるのではなく、心を込めて実践することである。

アメリカの歴代大統領のうち、優れた方々は自ら父祖以来の伝統の宗教的信念に基づいて行動し、神話を創造して来た。信念なくしては、自分の決定がはたしてどういふ結果を産むか不安となつて、重大な意志決定を下すことなど到底できない。

遠くは十八世紀に宗主国イギリスに反抗したワシントン、十九世紀中葉に南部諸州と対立したリンカーン、近くは二十世紀にソ連との間での核兵器競争で、一触即発の危機に臨んだケネディなどは、そういう極限心理を経験したのである。

アメリカという国は、人工的・作爲的な神の国の一つとして、建国時の「独立宣言」以来、引つ切りなしに神話を作り続けざるを得ない国家なのではないか。

(こうしたアメリカの思想的背景を理解するには、リチャード・V・ピラード／ロバート・D・リンダー共著、堀内一史ほか訳『アメリカの市民宗教と大統領』麗澤大学出版会、二〇〇三年、が有益。)

ブッシュ大統領は、早々と、二〇〇三年五月二日、「自由イラク作戦」と名付けた戦闘の終結宣言を発表した。「独裁者フセインは倒れた」と。

しかし、テロは簡単には止まない。どうも、ブッシュ氏も、取り巻きのラムズフェルド国務長官なども、幾分、高を括った見通しを懐いて出発したのではないか。イラクは、フセイン政権さえ打倒すれば、「後は一九四五年の日本占領と同じく、容易にアメリカ型の自由民主主義の国家を実現できる」と。

ところがどっこい、事はそう都合よく運ばない。アフガニスタンはどうにか落ち着きそうだが、イラクでは今までのところテロによる抵抗が簡単には息まない。イラク地域は、国家がなくなつたかの如く、水道も電気も病院もガタガタとなり、ライフラインは断たれ、治安は失われ、社会は無政府状態の如し。早く何とかしなければならぬ。

日本占領の場合には、事情は全く違つた。「億兆心を一に

して」と、竹槍でも戦うとさえ覚悟を決めていた国民であるが、敗戦するや、昭和天皇の「終戦の詔勅」(ポツダム宣言受諾)の放送を機に、サツと潔く武器を納めて無抵抗となつた。少しは日本的武士道が生きていた。一部の者は、目が眩んで進駐軍を「解放軍」として歓迎までした。

が、イラクでは、国民性からして、そんなわけには行くまい。日本などより遙かに戦いの歴史が古く、戦いに目を継いできたイラクだ。この地にも、当然に武士道はあるだろうが、日本的武士道でなく、異質の武士道があるのであろうか。

戦争には、文化と国民性とが結びついている。アラブの人々は、日本人よりずっと強かであり、アラブの誇りというものがあるようでもある。今この文章を書いている二〇〇三年の師走二十日までのところ、テロが頻発し復興支援は捗らない状態である。イラクから大量破壊兵器は少しも見つかからないが、おそらくフセイン政権の下で破壊されたものもあろう。

まさにこの点に、依然、先制攻撃の正当性がかかっている。もしも見つからないならば、イラクへの先制攻撃論は正当性を失うのである。

ここで、過去を顧みて、もう一つ思考実験を行おう。

イラク攻撃を、ブッシュ大統領は「急ぎ過ぎた」のではない

かということである。フセイン政権に対して、国連の査察を徹底し、もう半年くらい細かに調べあげる。「攻撃するぞ」の圧力を加えながら、大量破壊兵器の存否を確かめる。それでもイラクのフセイン政権が査察に協力しないようであれば——望むらくは再度、安保理事会の決議を行って——その理解の下に協力して実力行使に踏み切るべきであった。

そうしていたならば、爆撃に巻き込まれ殺傷される一般人の数も少なめに留めることができたであろう。ブッシュ氏は焦ったのではないか。あるいはイラク問題の根深さを、甘く見くびったのではないか。

先にも述べたが、テロ実行者たちを討つために、一般人を巻き添えにし犠牲にするのは、無慈悲であり悲惨ではないか。もつとも、こういう風に考えるのもまた、われわれ日本人の平和主義の悪い癖なのか。東海の小島の上で平和に暮らしてきた心根の優しい日本人の。

国際社会では、「ああ無情」でなければならぬのだ、と叱られるのであろうか。ただ、小説の『レ・ミゼラブル』には、寛大な神父がいて、盗人ジャン・バルジャンに銀の食器を恵んでやるではないか。一体、どちらの立場が、人類の歴史を創造するのであろうか。双方ともなのか。

オーギュスト・コント（一七九八—一八五七）というフランスの偉大なる社会学者は、フランス革命後のひどい混乱を眺めて、「代わりがないうちは壊すものではない」と述べたという（清水幾太郎『オーギュスト・コント』岩波新書）。

コント先生は、祖国フランスの革命の後、悲惨な状況を眺め、いたずらに革命を礼讃するのは愚である、と見て取った。また、ドーヴァー海峡の対岸の国イギリスが作りつつあった資本主義という私利優先の競争社会の有様を観察して、フランスはそのようにはなりたくない、と警告した。

人類の歴史において、完全なる建て替え、つまり革命という急進的な方法がよいか、あるいは少々のリフォームという漸進的な方法が望ましいか。この永遠の問いを、われわれは抱えているのである。

普通に考えれば、一旦、物を壊し、人を殺してから復興するという方式よりも、できることなら、壊さない方がよいに決まっているだろう。日本だって、大東亜戦争の当時、広島・長崎への原爆投下を始め、都市への絨毯爆撃によって、どれほど多くの犠牲者が出たことか。いのちは一旦殺したらおしまい。殺してから作り直す訳にはいかぬ。

もつとも、「いや、旧を壊したからこそ、新が生まれ、今の

発展した日本が建設されたのだ」という皮肉な見方もあるにはある。

経済学者でケンブリッジ大学教授のJ・M・ケインズは、一九三六年、「土に穴を掘ってごみを埋め、次にそれを掘り返して、また埋める、ということでも経済成長ができますよ」と、仕事がなく大不況に喘いでいた国民に対して、揶揄気味に助言した。破壊は創造である、と。

今こんなことを言えば、「後知恵」であるかのように聞こえるが、後知恵で結構なのである。それは今後、歴史から学んだ後知恵は、「前知恵」として使うことができるのである。

しかし、ともかく、ついに二〇〇三年十二月十三日夜、イラクの独裁者フセイン元大統領が、米軍の兵士によって隠れ家の地下で発見され、身柄を拘束された。テレビの放映をご覧になられたではありませんか。

ただ、フセイン氏は、独裁者の最後としては、チャウセスク氏やミロシェヴィッチ氏などの通例に違わず、哀れというか、ぶざまというか、見るに忍びない姿で、全世界向けのテレビに登場させられた。これもアメリカ一流の情報戦略であろうか。

あのあさましい姿のフセイン氏の放映は、敗者の名誉を重んじる騎士道からすれば、アラブ人の気持ちを逆撫でするような

映像の作為である。イスラム教徒の反感を呼び、好ましくない結果を生みはせぬか、と気に掛かる。

われわれは、イスラムとの「文明の戦い」に火を点けてはよくない。そのためには、慎重な配慮が欲しいところ。勝者側のリーダーの奢りは、やがて彼を敗者への転落にと誘う。

戦の終わりの儀式には、「敗者の名誉の尊重」がなければならぬ。それが武士の情である。スポーツでは、終わって勝者と敗者とが握手するではないか。それすら無視するならば「新しい戦争もやはり低俗なものに墮落した」と言うことになる。

フセイン政権打倒という戦争の終極目的は達成されたかの如く思えるが、むしろ課題はこれからではないか（二〇〇五年六月）。いかにして、イラクを再建するか、さらに国際テロをいかに減らすか。国際ネットワークが起すテロはなかなか減らないだろうが、イラク国内のテロはやり方によっては、やがて落ち着いて行くであろう。

一体、これからアラブ諸国に、アメリカ型の民主主義というものがあるのかどうか、難しい問題であろう。実はフセイン政権は、イラク国内のイスラム教徒のうち少数派である「スンニ

「派」——本来は比較的穩健な人々——から出来た政権だが、そのフセイン政権を倒せば、国民世論はイランと同じシリア派で人口多数グループと、北方イラクに住んで国家をもたない流浪の民であるクルド族とあわせて、それらが国政を左右することになる。スンニー、シリア、クルドという三集団は、三つ巴になって権力を争い、容易に一つへとは纏まらないだろう。数において負けるスンニー派が、ヒツシの抵抗を試みるのではないか。

イラクは、安定した親米的な民主主義国とはならぬ可能性がある、ともいわれている。どうなることか。

これまでもアメリカは、キューバなど世界各地に介入して来ているが、アメリカ型の民主主義という政治文化は、そうそう簡単に輸出して成功するものでもなからう。

ただ、アメリカの先制攻撃論に立つ果敢な行動は、予想外の波及効果を産み落としてきている。イラクの隣国イランは核施設への査察を進んで受け入れると声明し、またアフリカではリビア国のカダフィ氏までも大量破壊兵器の破棄を明言した。それぞれの国民にとり、とてもよいことである。

今後に向けての思考実験で浮かぶシナリオとしては、以下のような方向があらう。

第一、最悪の方向は、テロが止まず、無秩序が全土を覆い、英米はじめ派兵している二十数カ国が、治安と復興を放棄して、撤退するということである。それは後に大混乱を残し、住民はこれ以上の悲惨はないという事態に抛り出されよう。人々の幸せのために、それだけは何としても防止しなければならぬ。

第二、現在派兵している米英中心の派遣国が、どうにかイラク国内のテロを鎮圧し、しかる後に、イラク人自身の意志で——イスラム的——自治的体制が生まれる。そのとき、米英主導の体制が終わって「国連主導」、さらに「イラク自治」となる。国連のPKF（平和維持軍）、PKO（平和維持活動）が治安を司り、テロを抑止し、その支援を得てイラク人自身の政治体制が確立する。

ただその後、高い可能性として、シリア派が主導する隣国イランに見られるように、「イスラム型神権国家」——イスラム教指導者が強権を發揮する政治宗教一体の姿——に落ち着くかも知れない。われわれは、「代々、父母、またその父母から……と着せて貰った衣は、そう簡単に着替えがでない」ものであらう。

第三、なお、戦後処理として、拘束されたフセイン元大統領がどのように扱われるかという問題もある。イラク自身の裁判によるか、アメリカ自身の軍事法廷か、アメリカ主導の何らかの国際法廷か、国連主導か、あるいは国際刑事裁判所によるか。

日本（の戦犯）が裁かれた極東軍事裁判（東京裁判）は、全くの「事後法」に基づくものであって、その違法性が今もって問題とされるが、今回イラクでも事後法による裁判となれば、アラブ諸国からその正当性が疑問視されよう。裁判は、正常化後のイラク国民自身に任せ、国連が後ろにつくという方式がよいのではないか。

文殊の知恵、出でよ。

七 日本は、新次元の「人間の安全保障」に献身を

戦争による破壊の後には、住民の生活の復興・再建が待っている。その復興は、国民精神の復興であるとともに、常に経済の復興でもある。そして、復興のためには企業の活動が欠かせない。

ところが、なんとブッシュ大統領は二〇〇三年の十二月現在、「イラクに派兵している国々からの企業しか、イラクに入ること認めない」と主張した。フランス、ドイツ、ロシア、

中国の会社はダメというのである。漁夫の利、まかりならんと。一見、これは筋が通っているようだが、全くの利己主義であり、料簡が狭く下手な戦略である。アメリカ中心の利権の独占など、できはすまい。

第一次大戦が終って後に締結されたヴェルサイユ条約——ドイツに過重な戦後賠償を負わせて苛めたこと——の失敗を反省し、第二次大戦の後、マーシャルプラン（一九四六）というすばらしい援助行動をアメリカは取ったではないか。それは、「よき物を独占しない」という麗しき謙譲的行動であった。アメリカよ、祖国の歴史から、先人の賢い行動から学ばない、という理由はないではないか。

アメリカは、うんと寛大な心となり、イラクに薦めて、「どうぞおいでください」と、各国から企業を招き入れさせればよい。さすれば、各国の企業もまた、テロのリスクを共同で負担することになる。「虎穴に入らずんば虎兇を得ず」の譬えのよ

うに、リスクなき利はあり得ない。ドイツ、フランス、ロシア、中国などは、今までは派兵せずリスクを負わないでいる。だが、これからは各国の企業が、イラクのためにリスクを負い、結果、米英中心に偏らず、世界的な協力態勢をつくることになるう。

そうなれば、「異教徒のアメリカ人がイラクを無法に占領している」というイラク国民の反発感情も、大いに減らすことができるだろう。

いづどこでも、戦時の恩賞の独占は、恨みを買うだけである。建武の中興や、その後戦乱が続いた戦国時代の日本を振り返っても、そのようにいえる。力に頼って物事を独占することは、一時は成功しても、長い目で見ると結果がよろしくないであらう。

利益の独占は愛の実行ではない。かつて日本は、東アジア大陸でその轍を造り、自らそれを踏み、そして仕舞いには失敗した。イラクの復興では、アメリカ大統領のご賢察を期待したい。どうか心の目を開いて欲しい。

日本政府としても、同盟国アメリカだからこそ——同盟国としての十分の共同行動を行いつつ——積極的にそういう提言を行うべきである。それが同盟国アメリカのためにもなる。同盟相手、真の友には、時に応じて耳に痛い諫言も行わなければならない。

ところが、失敗しつつも、やはりアメリカには偉いところが

ある。アメリカ政府は思考の幅が広く、行動は強かであり、迅速である。早くもアメリカ政府は、ヨーロッパやロシアなどに特使を派遣し、イラクに対する債権を放棄したり、割引することについて、イラク国民に成り代わって各国に交渉を進めている。これは偉大な行為ではないか。

戦争を始めるときには、予め、いかに終わらせるかについての見取り図と行動予定とがなければならぬ。そして、終わらたとたん、すぐさま予定した後始末の実行に入らねばならない。

この方面でも、日本はイラクのために何もしていない。普遍的理念を基礎に「各国の間を取り持つ」という調整活動が、どうも日本は外交として不得手である。日本の駐イラク大使が東京に止まっているともいう。これいかに。

いざという時に、日本は自分の財布から身銭を切るといふことに落ち着く。自分から進んで身銭を切るといふことも大切だが、「各国の間を取り持つ」ということも、世界の中で生きるには不可欠なのである。それは正義と愛の行動へと各国を誘うことである。

日本は、昔から、大岡裁きにおいて「三方よし」となる発想を工夫したのではなかったか。国民もそういう公平な解決法を望んで来たのではなかったか。それを、国内に限定せず、国際

問題にも応用しないという手はないではないか。

当面は、フセイン政権が打倒され、安保理決議一五一一（二〇〇三）に基づき、米英主導の「暫定占領当局」が一時的にイラクの主権と領土保全と治安の責任を負っている。そして、速やかに「イラク暫定統治機構」を発足させ、行政をそれに譲る方向で動く。

その際、違法なテロの抑止に関しては、武力行使も含めた断固たる行動が不可欠である。ここまでは国連でも一致を見た既成の国際世論である。

国連は、武力制裁（憲章第七章第四二条）から、平和維持軍（PKF）を経て、第四一条に基づく平和維持活動（PKO）までの直接行動を取り得る。このほかに、いろいろな制裁措置や査察などを行いうる。

この点に関しては、かつて連合赤軍浅間山荘事件において現場の総指揮を執られた、元内閣安全保障室長、佐々淳行氏の「イラク派遣は外交活動と捉えよ」（産経新聞「正論」平成十五年十二月十四日）という論説が時宜を得ており、思考実験として有益である。

しかし、イラクに限らず、対テロ行動では、各地の状況が異

なるから、それぞれに応じて行動を正当化する国際世論作りに向けて、いちいち具体的な対話が必要である。例えば、東ティモールは、独立が問われたのであり、イラクと同列に反テロを論じることはできない。

そして、テロを行っている人々も、どうか紛争解決の平和的な精神を培養し、平和的な対話を通じて正当な主張を述べていただきたい。

人間とは、「自己に語りかけてくる言葉に応答することにより、自己を超越していく存在」である（大島末男『人間とは何か』麗澤大学出版会、二〇〇一年、一六二ページ）。

そこで、日本は、ブッシュ大統領の選挙を意識した焦りの心理を解し、またせっかくだきてきている国連を無用物などといって否定することなく、それをより良く指導する。アメリカと国連との関係修復にも努力する。アメリカ大統領に、日本はそう助言するとよい。

一見、国の内と外は別物のように思えるが、決してそうではない。外交で「自己流の正義感に立ち世界を分裂させる心理」は、国内にも反作用して、国力を弱体化させるのである。それは、アメリカ国民の幸福のために、決して好ましくない。家庭

でも、学校でも、人々の心理を分裂させ、離婚などの家庭争議、学校での苛めや銃の乱射などがそれである。

国際テロをいかに抑止するかという重要な点は、テロを行う人々の主張の中で、正当な部分を認め、暴力的方法でなく、出来る限り平和的方法に訴え、それを実現するように支援することである。これは、相手がイスラム教徒であるとないつかわりなく、人類たるものの普遍的義務である。

この視点から考えると、今度のイラク戦争の問題では、日本の貢献の方法が問われる。日本の貢献義務とは、イラクが平和な地域となり国家として再建されるために、テロを抑止し、人々のライフライン——上下水道、食料、医療、学校、及び雇用機会の創出——への支援を図ることにある。その実行方法としては、民間にはNPOがあるが、国家としては必要な資金援助とともに、再建の実動部隊として自衛隊を派遣することであらう。

こうした状態であるからこそ、日本は自衛隊を派遣すべきなのである。これは、先に述べた国連憲章に謳う武力行使（PKF）ではなく、平和維持活動（PKO）に属する行動を担うものである。自衛隊は実力（武力）を装備しているが、それは自衛のためにしか使わない。

泥縄式に作った「イラク特別措置法」（二〇〇三年）には、自衛隊の行動目的は「人道的復興支援活動」（国連決議一四八三号に基づくもの）と謳われている。

自衛隊派遣については、「そもそもイラク攻撃には大義がない」といって反対する向きもあるが、確かにこの批判は厳しい。これに対しては、大量破壊兵器が見つからぬとすれば、アメリカの大義は失われる。しかし、戦災からの復興支援においては、紛争の火に対して、火事場論が多少とも説得的な水をかける。すなわち、現に燃え盛っている火事を消す努力をせずに放任して置くのは、人類社会の大義に悖る、と。

すべての外国人が今イラクから引き上げればどうなるだろう。再び、国際テログループの温床ともなりかねないだろう。

われらが時の首相、小泉純一郎さんは、近來稀な難局に立たされた。人は後に引けないぎりぎりのところに追い込まれれば、知恵——入れ知恵——が出るものか。二〇〇三年十二月十日の記者会見で、首相は前代未聞の憲法解釈を捻り出した。

すなわち、自衛隊派遣は、日本国憲法の前文の精神によるものである、という解釈である。自衛隊派遣は、憲法前文にいう次の精神に基づくと。

憲法前文は、平和主義に徹することを述べ、日本が世界平和に積極的に貢献すべきことを謳い上げる。

「日本国民は、恒久の平和を念願し、……平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼」し……

「われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。」……

「いづれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならない」……

「日本国民は、国家の名誉にかけ、全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓ふ。」

大方の識者とマスコミは、この解釈を聞いてびつくりしたが、たちどころに賛否両様の声を発した。

憲法学者は、これまで型にはまった解釈論——私も聴いて育った立場——で講義を続けて来たからか、奇想天外、不当な憲法誤用であると、首相を論じた。この前文を、もっぱら第九条の戦争放棄の規定とのみ結び付けて来たのが、われわれの学んだ憲法の通説であった。

首相のこの新解釈——目くらまし論法——を肯定する声は、むしろ憲法学者以外の人々から上がったようだった。アツと驚かせるのがいつもの小泉流であるが、まことに自衛隊派遣はもちろん、他の外交問題にとっても、この憲法解釈が新機軸（イ

ノベーション）であることは確かである。偉大な政治家は、意志決定において意味のある新機軸を遂行する人でなければならぬのである。

われわれ日本は、やはり火消しと復興のために、資金を出し、人も派遣し、人道的支援に貢献する道を、まじめに思考実験して見るべきであろう。その理由は次の通り。

(一) テログループの危険な行動を抑止し、健全な国家をイラクに構築することが、イラク住民と、われわれ人類の共通目である。しかし、日本は直接武力でテロを抑圧する行動に出ることは、いかにせん日本国憲法の上からして無理があるので、国連とアメリカなどによる武力行使に付いて行って、「人道的支援」及び「復興支援」を引き受けることしかできない。

この意味でも、日本国憲法は、まことに理想的なもののように見えて、実は時代遅れの代物なのである。新しい戦争の時代にとって使いものならぬ。今の憲法を保持し続けているは、日本は国連のいう「人間の安全保障」に貢献できないのである。

(二) 安全地帯だけを想定した日本のイラク特別措置法の哲学は、与野党を問わず日本の国会の甘く身勝手に非現実的な思

考の産物ではないか。イラク全土が危険地帯であり、支援は危険な地域で行われるからである。

とはいえ、危険だから支援のための派遣をしないというのは、国家として国民として、「金は出すが人は出さない」という、まことに卑怯で臆病な行動である。やはり人を派遣し、危険を覚悟して、イラクの人々の平和の回復に支援をすべきである。

危険地帯では、それなりの防備と行動能力をもつものとして自衛隊を派遣する——むろん、NPOや企業の働き場所もある——のが至当であることはいうまでもない。

(二) そのとき、日本の行動の理由付け(正当性の説明、アカウンタビリテイ)には、国連の一員としての義務——集団安全保障のために行動する義務——と、アメリカの同盟国としての義務と、二重の義務を重ねて考えねばならない。そして、物の性質にもよるが、アメリカも日本も国連加盟国なのだという事実を基本とし、次に同盟国という関係をその上に重ねて、行動を決定する。

イラクへの自衛隊の派遣を決めるには、国連加盟国という条件を全く無視して、日本はアメリカの同盟国だという条件だけから行動するのでは不十分である。

国連の決定が分裂して何も決まらないときには、同盟国としての関係が前面に出るほかないが、国連の決定が成立すれば、それに従うのが加盟国として妥当な道である。

国連を軽視する人々は、

- ① 反米意識を交えつつ、「国益だけで行動せよ」とか、
- ② あるいは日米安保の同盟国という立場からだけで行動せよ、

と主張するが、そういう判断はともに不完全である。

戦争は、命を懸ける最も厳粛な行為であるが、人類世界では一種のゲームであるには違いない。ゲームにはゲームを終わらせるルールがなければならぬ。人類世界に、国際法としてさまざまな戦争法規が発達して来たゆえんである。

新しい戦争の時代には、「戦争の哲学」だけでなく、復興を導く新たな「平和の哲学」が求められる。戦争という大事件では、事前に予想できない新たな偶然的な事情が発生するから、どうしても事後的となる面があるけれども、ともかく歴史を造るわれわれにとっての要点がここにある。

アラブ地域の平和を念じつつ、私は、二〇〇四年三月三日の時点でこの哲学と政策を提案し、このノートに書き残す。これから未来の歴史がどう動くか。歴史をどう造るか。

以上をもつて、私の一つの思考実験とした。読者の皆さんも、一緒に思考実験を行って記録しておきませんか。

なお、日本における最も鋭くて自律的な哲学者の一人、加藤尚武教授の『戦争倫理学』（ちくま新書）をお薦めしたい。思想の訓練にいい教材である。

八 自衛隊派遣についての思考実験

ところで、この文章は二〇〇四年五月二十一日に追加記入しているが、イラクでは、政権移譲も平和秩序の回復もないままに時が過ぎていく最中、まことに悲しくも慨嘆すべき事件が米軍において行われたことが、次々と発覚している。国際赤十字（IRC）も虐待に関する報告書を発表した。

収容所（刑務所）におけるイラク人収容者への虐待がそれである。これまでの報道で明らかになった虐待の行為には、次のようなものがある。

- ① 収容者たちを裸にして重ねピラミッドを作らせる。
- ② 収容者に性的行為を強要する。
- ③ イスラム教徒の忌み嫌う豚肉を口に押し込む。
- ④ さらに何人かの殺人が行われたとの報道もある。

もしもこうした報道が事実とすれば、ジュネーブ条約（一九四九年）違反であり、米国軍の犯罪である。イラクの人々が、アメリカを中心とする各国の軍隊を不当な占領軍と見なして、それを排除するという名目でテロを行い、撤退を求めるのは理由があることになる。

米軍がこんなにも倫理的に墮落し、国際法に違反する行為を重ねる軍隊であれば、いかにテロを禁圧するという正当な理由があるにしても、その理由などは吹き飛んでしまう。

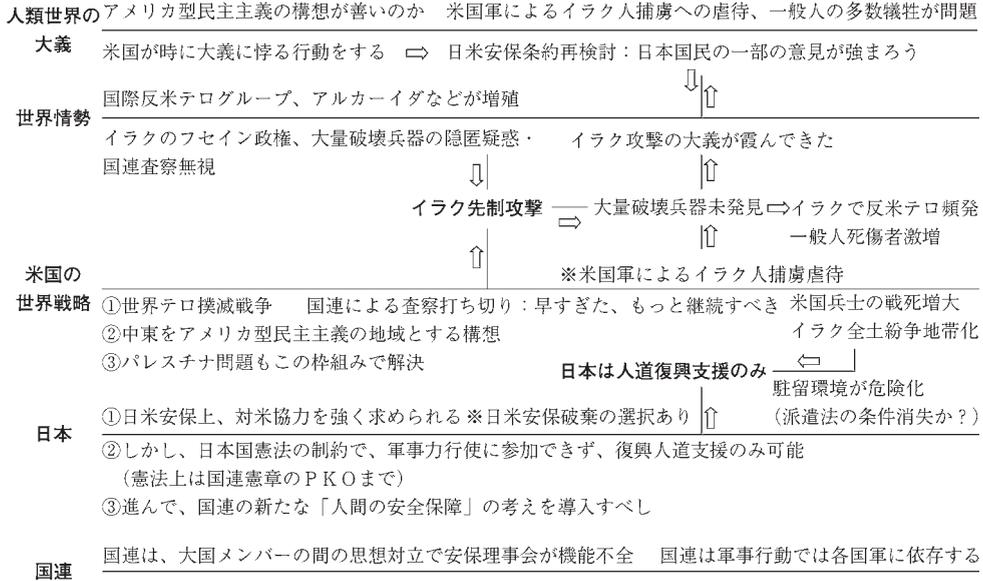
イラクの人々が恭順するだけの卓越した行為を見せないならば、正統な軍隊ではない。違法者の集団ということになってしまふ。早急に事実関係を確認し、違法者に妥当な処罰を行い、イラクの人々に認められる清潔で正当な行為を回復してもらいたい。

軍隊の中に規律の緩みと奢りが彌蔓していたのであろう。ベトナム戦争の末期にも、似たような不法行為が行われた。大義・正義を欠く戦争行為に、こうした不法行為を生み出す傾向が高い。

アメリカの同盟国として、アメリカに乞われて自衛隊を派遣した日本も、放置すれば低級な行為を行う米軍と同罪の一端を担ぐことになる。アメリカに同盟国として率直に速やかな改善を求めねばならない。

イラク自衛隊派遣問題の思考実験

—複数の因果系列の絡み合いから政策構築する—



(注) 問題は複数の因果系列と善悪判断の系列が絡み合っており、どこかで道を選択するほかない。そこに、各国、各人の価値観が介入するほかない。今後は、「人間の安全保障論」から自衛隊を派遣する道が可能、そのため憲法含め国内法の再構築必要。

日本の自衛隊をイラクに派遣する政策については、かなり多くの矛盾する筋が複雑に絡み合っていて、単純ですっきりした答えは出せない。(図参照)

どんなものであれ現実の政策というものは、単純化した状況の中で一本の筋だけで実行することの出来ないものであり、矛盾した筋を含みながら決断し、矛盾を覚悟で実行せざるを得ないものである。具体的に考えてみよう。

例えば、稲を作る時、外界から遮断した理想的環境である温室の内部でなく、雨も風も乾燥も虫も病気も襲って来る現実の水田では、矛盾した筋をどうにか上手く組み合わせ、その総合で作らねばならない。稲を作る目的は、味のよい米を、厳しい気候条件と変化する気象変化に耐え、いかなる病虫害をも凌いで、安定的に実らせることにある。

ところが、稲は元々、熱帯の植物だから、寒い気候に耐えることはかなり難しい。肥料を与え過ぎると軟弱となり、かつ病虫害にやられる度合いも大きくなるし、稲の茎の節が間伸びして風に倒れやすくなる。また従来、多収穫の品種は概して米の味が落ちる傾向がある。こうした相互に矛盾する性質を、いかに上手に組み合わせるかを遂げるか、これが、歴史上、ず

つと品種改良と栽培技術の工夫の要点なのであった。

この稲の話は、生物学的な科学技術の事例であるが、軍事でも政策でも、ほぼ同様なのである。一本の筋だけから批評することはやさしい。いろいろな条件を無意識のうちに省略し、状況を単純化して結論を導くからである。派遣反対というだけなら、いろいろな理由を付けて、主張することは容易である。批評する方は、自分の頭の中で満足するが、現実の問題はその批評では少しも片付かないままである。

多くの要因が絡むという点では、生物技術も人間社会と同様である。ただ、人間の社会問題の場合には、善悪の価値判断が入ることである。生物技術にも少しだけ入るには入るが、単純である。

そこで、最後の**思考実験**として、自衛隊派遣に「反対」の立場を列挙し、それと逆の立場を突き合わせ、検討していこう。それを吟味すれば、おのずと**妥当な道**が明らかになるのである。

これは、歴史を創造する営みであり、**模擬実験・シミュレーション**であって、**軍사용語**でいえば**図上演習**である。

反対① イラク攻撃には大義が存在せず

そもそもアメリカのイラク攻撃は大義を欠くものであり、不当な攻撃である。イラクがテロの**温床**であるとか、大量破壊兵器を所有しているとか、理由は何であれ確認されないものであり、国連安保理事会も攻撃を認める決議を行っていない。それゆえ、復興のための人道支援であれ何であれ、同盟国として日本がアメリカに協力してイラクに自衛隊を派遣することには、出発点で正当な理由が存在しないのである。

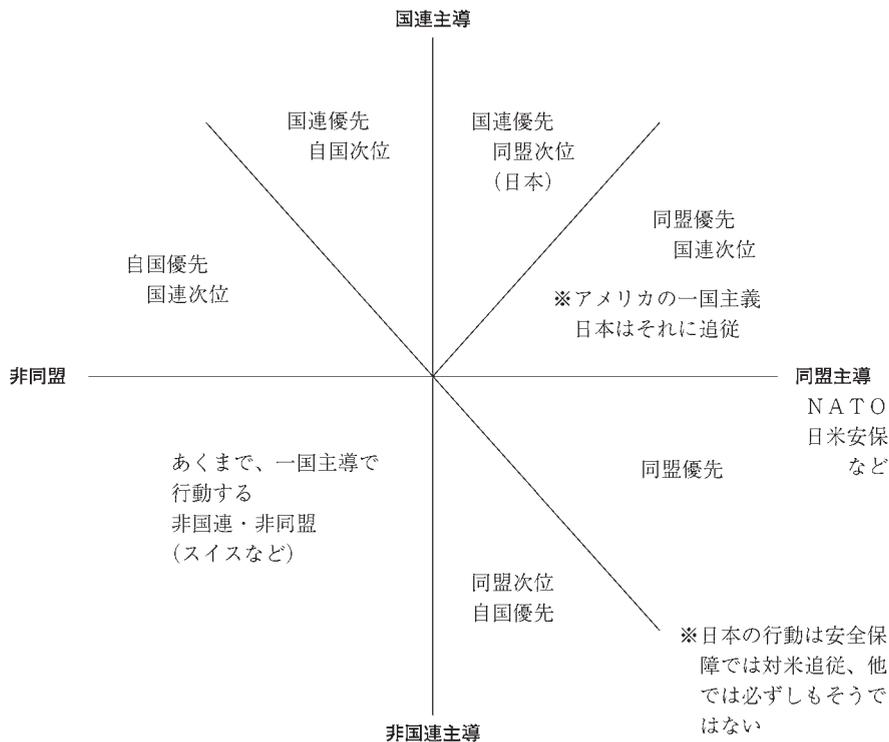
反対② アメリカの不当占領こそが反米抗議行動を引き起こす

もしも、アメリカがイラク攻撃を行わず、フセイン政権を打倒せず、アメリカがイラク占領を行わなかったならば、今のようないラク国内の反米テロや抗議行動は起きず、治安もよかつたであろう。

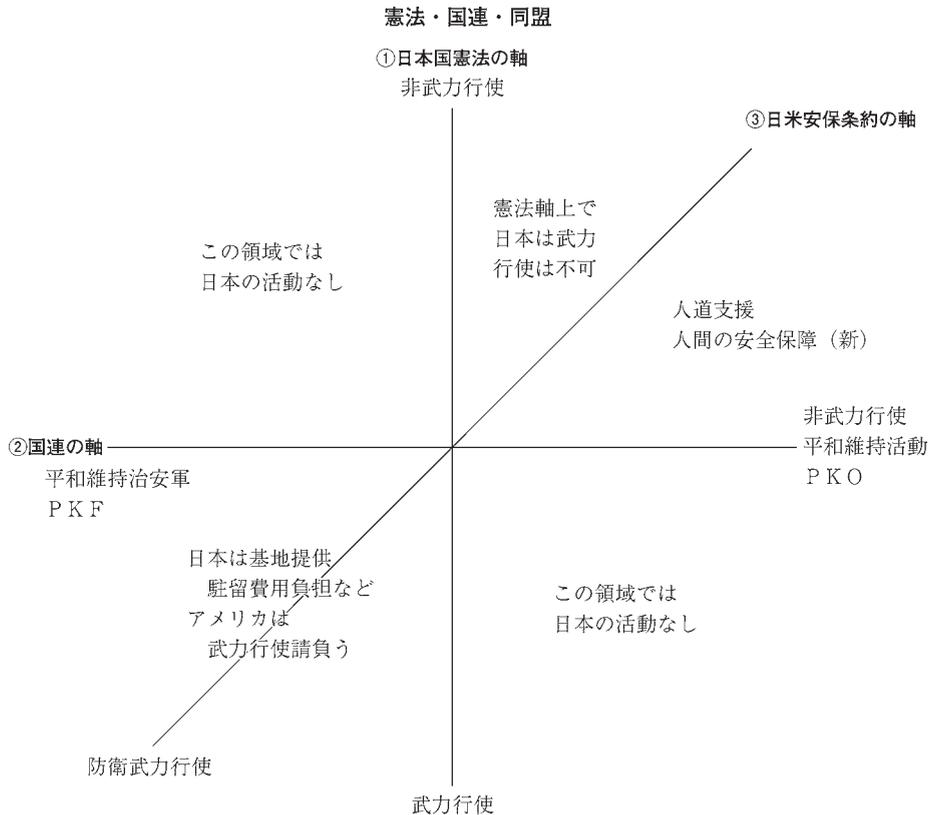
今からでも、アメリカなど各国軍は軍事占領をすぐにやめて撤退せよ。イラク国内のいろいろな勢力による占領反対のテロや抗議行動は、すぐに**終息**するであろう。治安がよければ、復興支援のために派遣するのは、軍隊としての自衛隊でなくともよいであろう。

反対③ 自衛隊の軍事行動は日本国憲法に違反する
武力による国際紛争の解決を禁止する日本の現行憲法第九条

国連と同盟との優先関係



(注) 現代の世界は、国連が万能ではないが、一応人類社会の最も権威ある意志決定機関であり、そこでの決定が「大義」を示すものといえる。しかし、同盟が結ばれるときには、同盟の決定と国連の決定とが対立することがあり、そういう場合に国連優先か同盟優先か、の選択を迫られる。アメリカは、国連の決議なしに一国主義・先制攻撃主義に基づいて、国連軽視の立場でイラク攻撃を開始した。日本も、日米同盟に基づきアメリカの行動を支持し自衛隊を派遣したわけである。理想は、国連決議とアメリカの意志と一致し、それに日本の意志も一致することである。「イラクが大量破壊兵器を隠匿しているから、それを見つけ出し廃棄させるのだ」という「アメリカの主張した大義」なるものは、どうも偽物であったようである。大量破壊兵器は、依然イラク国内で発見されてはいないからである (2004年5月20日現在、記す)。



(注) 日本は、①日本国憲法、②国連の加盟国、③日米安保条約の当事国という3つの軸の上で行動しなければならない。安保軸と国連軸とは場合によってズレが生じる。①日本国憲法では、国際紛争解決に非武力原則を守ることという根本制約が課される。その上で、日本は、②国連加盟国としては、国連の武力行使でない非武力的な平和維持活動、すなわち人道支援・人間の安全保障に関する活動を行い得る。さらに、③日米安全保障条約の一方の当時国として、武力行使はアメリカのみが担当し、日本は日米両国の自衛のための非武力的な活動を担当する。武力行使はアメリカのみが行うということになり、これは責任の分担という意味では、まことに日本無責任の条約である。日本は危険な行動を負担せず、アメリカだけが負担するという奇妙な片務的条約、アメリカのお人よしの善意におんぶしきった条約ではないのか。それゆえ、日本は一人前ではなく半人前国家ではないのか。

むろん、安保条約には、東アジアでの対中国・台湾、朝鮮半島、ソ連・ロシア、東南アジア、そして日本の監視というアメリカの軍事大戦略が背後にありきと知るべし。

の規定からいって、自衛隊が、海外でも国内でも、外国軍隊や外国テログループと交戦することは禁じられている。したがって、攻撃され武力を使って交戦する危険のあるイラクの地に自衛隊を派遣することは、憲法違反であり、派遣すべきではない。

反対④ 派遣は二重の意味で違法行為である

日米同盟があり、アメリカの要請があるとはいえ、アメリカのイラク攻撃自体も国際法違反の不当なものであるから、日本が憲法違反を犯してまで、自衛隊を派遣することはない。派遣は国際法にも日本国憲法にも、二重の意味で違反することであり、許されない行為である。

矛盾の解決には、いろいろな方法がある。ドイツ、フランス、中国、ロシアなどのように、拱手傍観の側に立つのも一つの選択である。従来日本は、いろいろな理屈をくつつけて、この立場に沿って来た。

他方、アメリカのように、どこにでも軍事介入するのも、もう一つの極端な道である。

しかし、日本は、もうそろそろ何もしないという無作為は許されまい。国民も、一九九〇年代初めのイラク戦争で歴史の

化を少し理解した。人類社会の平和を促進する上で、どのような責任を負うか。昔、人から与えられた憲法に縛られ、安住することは、どうであろうか、と。

この思考実験には、ここで私の計算と答えは書かないことにする。皆さんのものを、頭の中でお書きください。

幾つかの大国のように、テロには反対といいながら、実は手を拱いて傍観し、何もしない。それは卑怯な態度である。それでは、イラクが国際テログループの温床となることも防止できない。

こうした複雑さを解きほぐしながら、いかにすればイラクに平和が早く訪れるか、われわれは思考実験を行ってみなければならぬ。

アフガニスタン、イラクの問題は、下手をすれば世界中が「文明の衝突」に引きづり込まれ、全人類が宗教絡みの戦国時代を迎えることになる。

日本としても、日米同盟か、国連主義か、あるいは単独国益主義かという選択を迫られる。日本国憲法をもたらし一九四五年の敗戦後遺症に縛られた国際戦略論、非武装中立論は、もう使い物にならなくなった。

これからの隣国中国は強大となろう。悪くすればアメリカとカリブ周辺国との関係のようなギクシャクした関係を東アジアに生まぬとも限らぬ。願わくば、主権平等で相互不可侵の関係を構築こうちくしなくてはならぬ。

アラブ問題に、日本はより一層思慮しりよを巡めぐらし、知恵を高めねばならぬ。東アジアの将来にとって、その思考実験が必ず役立つに違いない。

* 編集者註…故永安幸正教授は、全十二章の歴史論を一章ずつ研究ノートとして本誌に発表してこられた。本稿は、その第十一章である。

